
ラストバトル

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストバトル

【Nコード】

N2373V

【作者名】

野生

【あらすじ】

賞金は300万円！？

桜花高校の卒業式で行われる大イベント。生徒たちによるバトルロワイヤル。

奇想天外気分爽快

バトルを勝ち残るのは誰だ！？

m i x i に掲載

プロローグ

プロローグ

「3年D組二十一番 はぎわら・いつき
萩原一騎」

「はい」

校長に名を呼ばれ、俺は全校生徒の集列した体育館の壇上に上がり、桜花学園の卒業証書を受け取った。

いろんな事があつた学園生活も今日が最後。

泣き出す女子もいれば、最後まで笑ってるヤツもいる。

でも、それらの感情は一時。

自分の卒業証書を受け取り席に戻ると、彼らの顔は一樣に興奮していた。

まあ、それは俺も同じだな。

（第三校舎の……屋上か）

卒業証書と共に配られた紙に目を落とし、心の中で静かに呟く。
学園最後のバカ騒ぎ。

俺も、

それが待ち遠しくてしょうがなかった。

式は滞りなく進行し、卒業生全員に卒業証書と学園の“どこか”
が記された紙が行き渡る。

そうして、校長の祝辞が終わりに差し掛かったとき、会場には卒業生だけでなく在校生を含めた、学園全生徒の興奮が溢れんばかりに充満していた。

そして遂に

「とまあ、建前の口上はこのくらいにして・・・」
待ちわびていた時がきた。

「あまり焦らしてもつまらんからな。——よしっ。てめえら、準備はいいかっ。和気あいあい、爽やかな卒業式はこれまでだっ」

「オオ——ッ」

校長の呼び掛けに、卒業生一同が雄叫びを上げた。

その生徒たちの姿に校長はニカツと白い歯を見せて笑い、俺たちにとって最後にして最大のイベント。

『桜花学園バトル卒業式』の説明を開始した。

「てめあ、よく聞け。基本ルールは今までと同じ。各自、卒業証書と一緒に渡された紙に書いてある地点からゲームスタート。火器、刃物、体術、魔術、その他諸々の使用は全てOK。不意打ち、袋叩き、なんでもあり。勝った奴が正義。優勝者には賞金300万円。学園最後のバカ騒ぎ、思う存分暴れて来い」

「ウオオオ——」

鼓膜が破れそうな、沸き上がる盛大な歓声。

生徒たちの興奮が、この日最高潮に達する。

校長のその言葉と共に卒業式、もとい、桜花学園バトル卒業式の開会式が終了した。

ガヤガヤと、各々のスタート地点へ生徒たちが散っていく。

その様子を椅子に座ったまま眺めていると、不意に先生たちが並ぶ席の方から、俺を呼ぶ声がした。

「おい、一騎。どうした？ まさか、怖気づいたのか？」

「まさかっ？ 大丈夫だ、先生。今、行くよ」

「それでいい。頑張ってこいよ。俺はお前が勝つのに賭けてんだから、負けたら承知しないぞ」

「んな、理不尽な」

メチャクチャな声援に押され、俺は苦笑を洩らしながら肩を竦め、「やれやれ」と椅子から立ち上がった。

そうだな、この辺で俺の紹介をしておこう。

短くに乱雑に切り揃えた黒髪に、鋭い切れ目の黒眼。

身長は、まあ、同学年では大きい方だ。

紺色の制服が目立つ中、俺の着る制服は靴も全て漆黒。

別に細かい意味はない、ただその色が好きなだけだ。

腰に携えるのは、匠の技の結晶にして、武器の最高峰。
と銘打たれた日本刀。 《神楽》
かくら

二つ名に《黑夜叉》と与えられた俺の名は、萩原一騎。
バカ騒ぎが大好きな、どこにでもいるただの卒業生だ。

第1章 侍VS忍者 力VS数

ピーヒョロロロ

「ふあゝあ。のどかなな」

遥かな空。

天高く飛び自由に鳴く鳶の清響こえに、屋上の床に背中を付ける俺は独り呟いた。

屋上のコンクリートに背中を付けたまま、第一グラウンドに設置されたバカでかいカラクリ時計に目を向ける。

現時刻十一時五十七分

ゲーム開始まで、あと3分。

「さゝて、一番手はどいつかな？」

俺は不敵に頬を吊り上げながら、指先で《神楽》の柄を撫ぜた。
あいつらは殺しても死なない奴ばかりだ。

しかも、今日は学園最後のバトル。

荒っぽくなるのは、目に見えてる。

「まあ、そうじゃなけりゃ楽しくないんだけどな」

これから始まるバカ騒ぎに、呟く俺の頬がさらに不敵につり上がった。

「ホント、俺もどーしようもないバカだな……」

少し自嘲気味に笑って、俺は大きく寝返りを打った。

時計の秒針が、文字盤の上を天上に向かって時を刻む。

5……4……3……2……

ボンボ——ンボ——ン

正午になり、カラクリ時計が動き出す。

時計の文字盤が割れ、中から飛び出した人形が派手に空中で踊り出した。

そして……

正午を知らせる鐘

開戦を知らせる鐘の音と同時に、俺は跳ね起き、飛び退いた。

飛び退きざまに背後へ目を走らせると、今の今まで俺が寝転がっていた床に、無数のクイナと手裏剣が突き刺さっていた。

「おいおい、コンクリートだぞ」

吐き出す声に、焦りはない。

いや、むしろ。

ゲーム開始早々勝負を掛けてきた馬鹿に、俺は心から喜んだ。体勢を立て直し、俺は全神経を集中させる。

大気を切り裂く風斬り音、横手から襲いかかるクイナと手裏剣の鈍く光る刃。

「しゃらくせえ——っ」

雄叫びと共に、俺は《神楽》を鞘から抜き放った。

視界を覆い尽くす凶刃の礫を、今度は避けずに迎え撃つ。

迫りくる刃先目掛けて《神楽》の乱舞が舞い踊り、辺り一帯に甲高い音と共に火花の花が咲き乱れた。

俺は向かってきたクイナと手裏剣を、ひとつ残らず叩き落とした。俺に休む暇はない。

姿なき敵より、第三の奇襲が頭上から俺を襲う。

天空より降り注ぐ刃を迎撃せんと、再び《神楽》が舞い踊った。「つち。やべえ」

小さな悪態が口から零れる。

頭上からの攻撃はこちらの体勢が悪い上、重力を味方に付けたその一手は、先ほどまでの攻撃より鋭かった。

捌き切れなかったクイナと手裏剣が、俺の制服の布を切り裂き、肌を剥ぎ取り、傷口から鮮血を奪う。

だが、俺の血を啜らんと降り注ぐ凶刃の中で、俺の味方をする者がいた。

鏡の如く研ぎ澄まされたクイナの刃身に、俺の背後が一瞬映る。

「そこか——」

俺は二本のクイナを空中で掴み取り、叫び声と共に背後へと投擲した。

カキーンッ

甲高い音と共に、俺の投げたクイナが弾かれる。

俺に降り注いでいた凶刃の雨が止んだ。

「やつぱり、お前か」

晴れた凶刃の帳の向こうに立つ、瘦躯小柄な体に長く伸ばした髪を後頭で一房に縛る、綺麗に整った顔立ちの男子生徒。

それはまさしく、卒業生の中でも実力が認められている一人。

Aランカーの智将にして『忍者マスター』^{はぐれ・ほくま}。葉隠北馬だった。

「たくつ。初めっからAランクが相手かよ」

身体から溢れ出る興奮を吐き捨てるように俺は呟き、《神楽》の柄の握り具合を確かめながら目の前の北馬を観察した。

この桜花学園はその在学中の戦歴・勝率などによって、下のEランクから、D・C・B・A・S・SSと七段階にランク付けされる。

忍び装束に身を包み、その瘦躯からは考えられない戦闘能力と、

優れた統率力を誇る北馬のランクはA。

凄腕だ。

油断なく身構える俺に、北馬がその小さな口を開いた。

「おしゃべりはいいいよ、萩原一騎」

女子みたいな端正な顔。その艶やかな唇から、戦意たつぷりの言葉が吐き出される。

「それより、このゲームのもう一つの特典だけど。まさか、忘れちゃいないよね？」

「敗者は勝者の言うことを何でも一つだけ聞く、だろ。覚えてるよ、ちゃんと」

まあ、もちろん実現可能な範囲での話したが。

俺が答えると、北馬は満足げに笑って、腰に携えた忍者刀を引き抜いた。

短い刀身の忍者刀が、さんさんと降り注ぐ日光を浴び鈍い光を放つ。

「なら、いいや。——じゃあ、尋常に……」

小さな笑みを浮かべ言葉を紡ぎながら、北馬が体勢を低く構え、
「勝負っ！」

開戦の言葉を後方に流し、その身体を疾風に変えて飛び出した。
忍者刀を逆手に持ち、俺との間合いを詰めてくる北馬。

その動きは、疾い。

二十メートルはあった俺と北馬の間合いが、一瞬のうちに消失する。

俺は身体を左に流し北馬の刺突を避けたが、避けたと思った忍者刀は急激にその軌道を変え、真横から俺に食らいついてきた。

「ゲッ！」

間一髪。

俺は後方に跳び、忍者刀の斬撃をやり過ごす。

だが、そこはAランクにその名を刻む強者。

息つく暇もなく、北馬は超接近したこの状態から自らの懐に手を突込み、引き抜いた手裏剣を俺に向かって投げつけた。

俺の肌を切り裂かんと飛来する手裏剣。

でも、この攻めは四度目だ。

「何度も同じ手が効くかーっ」

第三校舎の屋上に、俺の叫びと鋼と鋼のぶつかり合う音が木霊する。

今度は一つ残らず、俺は全ての手裏剣を叩き落とした。

「さすがだね、萩原君」

「褒めても、何も出ねえーぞ」

「あらら、それは残念」

まるで休み時間に友だちと話すかのようにするかのように、俺と北馬が軽口を言い合い、笑い合う。

しかし、その言葉の端端には抑えきれない戦闘への興奮が滲み出

北馬も当然忍者刀の限界を判断し、小さく笑みを漏らすと、スツと腕の力を抜き、俺の間合いから飛び退いた。

「どわっ」

脚下に煙玉を投げつけるオマケつきで。

視界を濃い白煙が覆い尽くし、俺の視覚が封じられる。

仕方なく、俺は全神経を聴覚に注ぎ込み、北馬からの攻撃に身構えた。

だが……

いくら待っても北馬からの攻撃はなかった。

一陣の風に白煙が攪われ、俺の視界が開ける。

そこには、腕を手で擦る北馬が、観察するように俺のことをじつ——と油断ない視線を向けていた。

「イタタタタ。たくっ、たった一撃でこの威力だもんな。さすがは萩原君。SSランク『黒夜叉』の名は伊達じゃないね」

「やめろよ、照れるだろ。——それにしても。北馬、お前はよく俺にケンカ吹っ掛けてきたよな」。何か俺に恨みでもあんのか？」

俺が尋ねると、北馬は小さく、少しだけ拗ねたように笑って首を横に振った。

「別に、大した理由じゃないよ。それに、結局君には一度も勝てなかったしね。——でも、今日こそは勝たせてもらうよ、萩原君」

「止めるよ、まだ始まったばかりだろ」

俺がふてくされてそう言うと、北馬は勝利の微笑を湛えながら応えた。

「いや、もう終わってるんだよ。萩原君」

「は？ 何を訳の分からないことい……」

北馬の言葉に眉を顰める俺の視界が、不意にグラツと揺らいだ。「っな？」

傾く身体をどうにか踏み止まらせ、俺は驚愕に目を見開いた。

全身を駆け巡る痺れに、俺の肢体の自由が奪われる。

「こりゃ……、毒……か……？」

「ご明察」

俺の呟きに、北馬は微笑みながらポンと手を叩いた。

「つち。今の……煙玉か？」

「残念、それは外れだよ」

「な……に……？」

じゃあ、一体いつ？

額にじつとりと脂汗を滲ませながら、俺は北馬を睨めつける。

その最中、俺の眼が辺りに散らばったモノを捉え、閃いた。

「そう……か。クイナや……手裏剣に……毒を」

「っそ、それが正解。萩原君は毒の耐性が強いからね。直接血管内に毒を入れるくらいしないと効かないんだもん。——でも、さすがだね」

「何が……だよ」

「この薬つてさあ、0・0001グラムとかでアフリカゾウとかを動けなくする薬なんだけどな」

「おい……おい、相変わ……らず……無茶すんな」

遠まわしに、人間には使うなっただことだろ。

そんなことを考えながら、俺は何とか北馬との会話を長引かせ、体の回復に努めていた。

だが、そう易々と休ませてくれる相手でもなかった。

「さて、おしゃべりはこのくらいにして。毒の効果が切れる前に、勝たせてもらうよ。萩原君」

「やつぱ……り……、そうくる……よな」

肩を落とす俺に優しい笑みを浮かべながら、北馬は流れるような動きで一気に勝負を仕掛けてきた。

体勢を全く変えずに、北馬がスライドするように動く。

そしてその姿が突然、塵気楼のように霞み分裂した。

「ツチ。闇歩……か」

《闇歩》

それは移動の中に微妙な緩急をつけ敵を混乱させる忍術、いや、

暗殺術の一つだ。

しかも、体内に回る毒のお陰で北馬の姿が更にばやけて見えやがる。

おそらく、これも北馬の謀略の内だろう。

さすがは智将と呼ばれるだけのことはある。

「チクシヨウ、卑怯だぞ」

「今更だね、萩原君。この学園で卑怯なんて言葉が通じると思う？」

…… 正論だった。

そして、北馬が間合いに入ってきた。

先ほどまでの鋭く直線的な攻めとは違い、風に舞う桜弁のような流麗な身のこなしで忍者刀を携えた北馬が俺に接近してくる。

捉えどころのないその動きに、俺はがむしゃらに《神楽》の刀身を掬い上げた。

しかし、その斬撃に常の繊細さはなく、手応えもない。その代わりに俺の腕に鋭い痛みが走り、二の腕から鮮血が迸った。

「先に言っとくけど、あんまり傷を受けない方がいいよ。あんまり毒が体内に入ると、死ぬから」

「笑顔で言っなっ」

微笑む北馬に吐き捨てるように言い返し、俺は血糊を刀身に付けた忍者刀で牽制する北馬を睨みつけた。

北馬の薬。忍者の秘薬。

すぐに効果が切れるかと言えば、それは勿論望み薄。

となれば、残る手は自ずと絞られる。

「まあ。とりあえず、攻め……てみっか」

俺は大きく息を吐いて、痺れる手でしっかりと《神楽》の柄を握り、北馬目掛けて斬り込んだ。

思うように動かない体を引きずるように無理やり動かし、俺は自ら北馬の間合いへと飛び込む。

北馬は逃げようもしない。

その顔は、完全に自分の勝利を確信した笑みが刻まれていた。

はっ、舐められたもんだ。

俺は自らの身体の陰に隠した《神楽》を、横手から北馬の左肩へと走らせた。

北馬は斜めに傾けた忍者刀で《神楽》を受け、その軌道を上方へと流す。だが俺は上空へ流された《神楽》を踏み止め、間髪入れずに北馬へ袈裟切りの斬撃を送り込んだ。

北馬は体を僅かに捌き、鎖骨に食らいつく《神楽》の刀身をやり過ぐす。

屋上のコンクリートを切り裂き、《神楽》が床に突き刺さった。

「もらったっ！」

快心の笑みを漏らし、北馬が忍者刀で俺に切り込んだ。

「まだだ——っ！」

北馬の笑みを俺の咆哮が打ち砕く。

俺はコンクリートに突き刺さる《神楽》の柄を握る腕を支点に跳び、充分に体重を乗せた踵を北馬の鳩尾に決り込んだ。

足から伝わる硬い手応え、イヤ、足応え。

俺が蹴りつけたのは、十字に交わる忍者刀とその鞘だった。

「あつぶない、あぶない。さすがは萩原君。本当に毒は効いてるんだよね？」

靴底を鞘と刀身で防御しながら、感心したように、でも余裕たっぷりに呟く北馬。

俺は、その隙を見逃さなかった。

素早く身体を支える双腕のうち、左手を放し、懷に潜り込ませる。

そして……

「おい、北馬」

「ん？」

「お前のクイナ、返すぞっ」

俺は先ほど空中の奇襲の際に掴んでおいたクイナの残り一本を、間近でキョトンとする北馬目掛けて投げつけた。

「つく」

咄嗟にクイナに反応し、体を擦る北馬。

しかし、この近接からの奇襲を避けることは叶わず、その脇腹をクイナの刃が掠った。

しまった、と顔を歪めながら北馬が俺から飛び退く。

そして十分に距離を取ると、耐えきれなくなっただかのように、その場にガクツと片膝をついた。

「ホン……ト、抜け目ないな。君って……男は」

「っへ。これで……、五分と……五分だ……な」

全身を蹂躪する痺れに、俺は《神楽》を支えにしてなんとか北馬と向かい合う。

爛々と闘志に燃える俺の眼光を受け止める北馬は、それでもやっぱり余裕の表情を崩そうとはしなかった。

「それは……どうかな」

思うように動かない震える手で、北馬が自分の懷をまさぐる。

そして、引き抜かれたその指先には、小さな丸薬が摘ままれていた。

ソレを確認した俺は、この戦いの中、初めて本気で動いた。

「！」

おそらく、北馬には俺の姿が黒い疾風に映っただろう。

「っっ」

北馬の呻き声は、俺の背後からだ。

刹那のすれ違いざまに、俺は北馬の手から丸薬を奪い、その腹部に当て身を食らわせた。

俺の背後で片膝を付いていた北馬の身体が、冷たいコンクリートに倒れ込む。

パキ——ンという何かが割れる音が響き、北馬の細い左腕の袖口からリングの欠片が零れ落ちた。

「ずる……いな。萩原……君。今まで、手を抜いてた……でしょう」
寝返りをうち、恨めしそうに俺を睨みつけ呟く北馬に、俺は丸薬を呑み込みながら

「んなわけあるか」

と不満げに返した。

「確かに、手加減はしていたけど、俺は断じて手は抜いてないぞ」

「……それって、何か違うの？」

「全然違う」

丸薬の解毒剤のおかげで痺れが引く手足の具合を確かめ、俺は頬を掻きながら北馬の問いに答えた。

「手を抜くって言うのは、真剣に向かってくる相手を侮辱する行為だろ。俺はいつだって、向かってくる相手は敬意を持って返り討にしている。んで、手加減は戦い方の一つだろ。まだまだ先は長いんだ、奥の手を最初から見せるようなまねはしねえさ」

俺のその返答に、北馬は暫し瞬きをし、

「あはははははははは」

コンクリートの床に大の字に寝転がりながら、青く澄み渡る天井を仰いで大笑いし始めた。

そしてひとしきり笑い終わると、北馬は自嘲気味に笑って呟いた。

「やっぱり、萩原君には敵わないや」

「もう、行くの？」

制服を整え屋上の扉に手を掛ける俺に、北馬が呟くように語りかけてきた。

「ああ、悪いな。俺はもう少し祭りを楽しませてもらうわ」

俺が答えると、北馬は空を見上げたまま、クスツと小さく笑った。

「それじゃあ、僕に勝った御褒美に、とっておきの情報を教えてあげるよ」

「情報？」

「うん、情報。EランクからBランクの生徒たちが君を倒すため、秘密裏に『隊』を造り上げたらしい」

「『隊』？ ああ、五十人以上でチームを作るっていうアレのことか。そりゃ、また。景気の良い話だな。つか、今までもそうだった

たけど、何でお前はそんな裏情報を持つてんだ？」

俺がそう聞くと、北馬は本当に女の子みたいに、無邪気な笑みを浮かべて答えた。

「諜報活動は忍者の基本だよ。それと、一応『隊』の大將も分かっているけど、どうする？ 聞いとく？」

大將は言ってみれば、『隊』の弱点のこと……のはず。確かこのバトルのルールでは大將が倒された瞬間、『隊』の全員が失格になる。

北馬の握る情報。

それは俺にとって、垂涎の情報だ。

聞いておいて損はない。

俺は真っ青な空を見上げながら暫く考え、

「いや、いい」

と、やっぱり北馬の申し出を断った。

「いいの？ 『隊』の人数は半端ないし、Bランクまでって言っても、かなり豪華なメンバーだよ。それに、大將はだけはAランク。一筋縄じゃいかないとおもうけど？」

北馬の言葉に、俺は笑いながら小さく肩をすくめて答えた。

「関係ねえーよ。全員相手にして、根暗な大將さんを引きずり出してやるよ」

やる気満々に俺がそう言うと、北馬は「まあ、わかっていたけどね」とあきれたように呟いて、再び小さく笑った。

「そう……、そうだよ。頑張つてね、萩原君」

「おう。サンキューな」

「あつ、そういえば。最後に一ついい？」

「ん？ なんだ？」

北馬の声に、俺は眉を顰めながら振り返った。

「みんなの約束、忘れてないよね？」

その言葉に、俺は小さく笑い。

「当たり前だろ」

と、握った拳で胸を叩いて応えた。

「じゃあ、いいや。——勝ってね、萩原君」

「ああ、まかせろ」

北馬の励ましに俺は軽く手を上げて答え、屋上の扉を開き——ソッコーで閉じた。

気のせいだろうか……

そこはすでに、さまざまな武器を携えた生徒たちの巣窟だった。

「北馬——。やっぱり、大将を教えてください——」

苦笑いを浮かべながら振り返ると、北馬は相変わらず寝転がりながら、笑って手を振っていた。

「は——」

深いため息と共に、再び屋上の扉を開いた。

「萩原一騎イーっ！」

「んげっ」

殺到。

まさにその言葉が、ピッタリな光景だった。

でも、そんな殺意満々のこいつ等を前にしても、俺は自分の頬がつり上がるのを抑えることができなかった。

「どうしようもないな、俺ってヤツは」

自嘲気味な笑みを背後に置き去りにして、俺は戦陣のど真ん中へと自ら突っ込んだ。

躊躇うことなく振り下ろされる青竜刀の腹を拳で殴り、その柄を握る男子生徒の手首を蹴り飛ばす。俺はすぐさま肩を掠め階段の角に突き刺さる青竜刀の柄を掴み取り、先頭にいた男子の影から突き出されたレイピアをへし折ると同時に、ようやく腕の痛みに気づき手首を抑え始めた男子生徒のどてっ腹に靴の踵をねじり込む。低い呻き声を吐き出したそいつは、後ろにいた仲間たちを巻き込んで、階段から転げ落ちた。

「おっ、ラッキ——」

将棋倒しに階段を落ちて行く生徒たちを眼の端に収めながら、俺は階段の手すりに手を掛け、迷うことなく一気に飛び降りた。

綺麗な十点満点の着地を決める俺。

戦陣のど真ん中に突如として現れたターゲットの姿に、武器を手にした生徒たちは唖然として立ち尽くしていた。

「は、萩原だっ！」

漸く俺の存在を認識し、俺を取り囲む生徒たちが慌てて武器を構え始めた。

「止めとけ。こんな狭いところじゃ、相撃ちが関の山だぞ」

俺の警告を無視して、円陣に銃を構える生徒たち。

俺はため息を漏らしつつ、瞬時に身体を疾風に変え、俺を取り囲む生徒たち全員の武器を叩き落とし当身を食らわせた。

グラツと崩れる彼らを視界の端に収めつつ、俺はさらに下の階へ向かおうと、下の階へ続く階段へ振り返った。

「げげっ！」

下へと続く階段の踊り場。

そこには桜花学園科学部の連中が、対人ミサイルを準備して俺を待ち構えていやがった。

「ファイアー！」

威勢の良い掛け声と共にミサイルが発射。

「マジかよっ！」

俺は慌てて背後に飛び退き、廊下の影にうずくまった。

壮絶な爆音が轟き、爆風が吹き荒れ、辺りに粉塵が巻き上がる。

「あつぶねっ。殺す気かっ？」

苛立ちを罵倒と共に吐き捨て、俺はこの階段を断念。仕方なく、別の階段へ行こうと廊下に身を投げ出した。

……………

「は~~~~~」

用意周到この上なし。

まるで俺が逃げ込むことを知っていたかのように別の階段へと続

く廊下は、嬉々として武器を構え俺を待つ生徒たちに埋め尽くされていた。

「カッコなんか付けないで、北馬に誰が大将か聞いときゃよかったなあ〜」

がつくりと頂垂れながらも、やっぱり俺は好戦的に笑いながら、俺の前にひしめく生徒たちを睨みつけた。

じりじりと俺との間合いを詰めてくる生徒たち。

俺は彼らに見せつけるように、ゆったりと《神楽》を鞘から抜き放った。

《神楽》の氷の如き鋼の刀身が冷たく光り、敵意むき出しの数多の眼を映し出す。

「さすがに、気負いされるなんてことはないみたいだな」

臆することなく、むしろ興奮に笑みを漏らしながら、生徒たちの眼が少しずつ俺へと迫ってきた。

そして、

「ッウオ——っ！」

彼らが雄叫びと共に武器を振り上げたとき、

「戦闘開始だあっ！」

俺は既に彼らの懷に飛び込んでいた。

一番手前にいた小柄な男子の顎に左手で掌打をたたき込み、右手に握る《神楽》で振り下ろされたバトルアックスを受け止める。そして先に意識を飛した男子の手から零れ落ちるヌンチャクを空中でキャッチしバトルアックスを振るう男子の脛に叩きつけ、苦悶の表情を顔に刻みつける彼の胸倉を掴み、思いつきり地面へと叩きつけた。

廊下に口づけするそいつを眼の端に収めながら、俺は前方で杖を構える二人の女子目掛け駆けだした。

身を屈め一気に彼女たちの懷に潜り込み、間髪容れずに腕を跳ね上げる。彼女たちの杖が上を向き、充填されていた魔力が解放。杖

の先から放出された魔力に天井が破壊されるのを耳で捉えながら、俺は啞然とする彼女たちの背後に回り込み、手刀で首筋を打ちすえ、その意識を遮断する。

崩れる魔術師に背を向け、俺は次の敵へと身を投げ出した。

ピンポンパンポン

そんな戦場と化した廊下に、突如として校内放送が響き渡った。

「ハ―イ。それでは卒業生及び在校生の視聴者のみなさん。ただ今より、途中経過を発表しま―す。現在、失格者132名、カッブル誕生34組、告白玉砕41名、そして生存者は1036名となつていま―す。しか―し、まだまだバトルは始まつたばかり。優勝予想トトカルチョも、まだまだ有効ですよ―。それでは卒業生のみなさん、優勝目指して頑張ってくださいねえ―。新旧交代、新しく放送部部长になりました網谷未菜あみや・みながお送りしました―！」

「へ―。皆、けっこうマジでやってんだな―」

横手からメイスを叩きつけてくる男子を峰打ちで黙らせながら、俺はあらかた片付けた廊下を見渡し、呟いた。

「まっ、こんなもんか……な……？」

……What?

「何だ、ありゃ？」

廊下の端に見える異様な光景に、俺は目頭を指先でほぐし、もう一度よ―く廊下の端に目を向けた。

間違いない。

そこには、ユニフォームを着てバットを構える野球部と、油まみれのボールに火を付けるマネージャーらしき女子生徒が、俺を見ながら邪悪な笑みを浮かべていた。

「おいおい、冗談だろっ」

俺の戸惑いをよそに、野球部主将にして不動の四番、『豪打者』りゅうがき・かいと龍柿海斗がバットを俺に向け、日焼けで真っ黒な顔に健康的な真っ

白な歯を覗かせて宣言した。

「一騎、覚悟しろ——っ。地獄の千本ノックのスタートだああ——」

「バカか？ バカなのか？」

俺の戸惑いなんかまるきり無視して、マネージャーのトスが上がり、龍柿は思いつきりバットをフルスイングする。

燃え盛るボールが弾丸を思わせる脅威となつて、狭い廊下の中を的確に俺に向かって飛んできた。

「マジかよっ！？」

ギリギリで体を捌き、なんとか初球はやり過ごす。

しかし、俺の動きについてこれなかった制服の裾が、燃え盛る火球に焦がされた。

「あゝあ。なんてことしてくれんだよ」

悪態を漏らすがそんなことを気にしてくれるわけもなく、既に第2第3の打球が俺目掛けて打ち出されていた。

「暑っ 苦しいなあゝゝ」

今度は逃げねえ。

俺は《神楽》を握る手に力を込め、神速をもつて飛来する火球を迎え討った。

顔を狙う2球目を袈裟斬りの一太刀で切り伏せ、返す刀で右腹部に向かつてくる3球目を二枚に下ろす。

思った通り

火がついても球自体の殺傷能力を高くはない。

俺は余裕を持って、次に飛来する4球目に対応し《神楽》の白刃を走らせた。

だが……

「なっ！！！？」

間違いなく刀の軌道に入っていた火球が、突然俺の手元で急速にカーブした。

捉え損なつた火球が俺の脇腹に突き刺さり、制服を焼き、肌を焦

がす。

さっきの言葉を訂正しよう。

炎を身に纏った硬球は、かなり効いたあ。

視線を上げれば、いつの間にかバットを握る龍柿の隣に、腕を振り上げるピッチャーが立っていた。

「おいおい、熱くないのかよ」

「はっはっは、何を言っている一騎。僕の背中に燃え上がる、真っ赤な青春の炎が見えないのか？」

「いや、答えになってねえーし」

「ふっ、もはや何を言っても無駄か」

「お前がなっ！」

ため息交じりに呟く俺に、再び球数が倍増した火球が、次々に廊下の中を飛んできた。

「破っ」

気合いと共に腹部の痛みを吐き出し、火球を迎え打つ体勢を整える。

今度は打ち洩らしは無い。

ボールの回転を見極め、前進。軌道が変化する前に全て火球を叩っ斬る。

でも、さすがにコレは予想外だった。

「んなっ！」

まさか、燃え盛る火球に紛れて、火の玉と化したサッカーボールが蹴り飛ばされてこようとは。

驚く理性を置き去りにして、俺の本能がサッカーボールに対応。いつもの何倍もの速度で《神楽》を振るい、火の玉を真っ二つに切り裂いた。

奇襲に次ぐ、奇襲

火の粉を撒き散らし二つに割れたサッカーボールの後ろから、2つの火球が俺の顔面目掛けて飛んできた。

「どわぁ！」

俺は自ら体勢を崩し火球をやり過ごす。

そして体のバネだけを使って、即座に跳ね起きた。

再び俺を襲う野球ボール×2とサッカーボール×1の火球。

「いい加減にしろっ！」

火球を避けながら俺は激昂を吐き出し、渾身の力でサッカーボールを蹴り返した。

俺のズボンを焦がし、二つの野球ボールを弾き飛ばしながらサッカーボールが廊下の中を逆走する。

予想外の反撃に、俺に攻撃を仕掛けていた全員が激しくテンパった。

「うわっ。く、来るな——！」

必死の祈り虚しく、俺の蹴ったサッカーボールは大気を焼きながら彼らのど真ん中に突っ込んだ。

しかも、

「「あ……」」

運の悪いことにサッカーボールの炎が燃料に引火。

熱風が肌を焼き、凄まじい爆音が響き渡った。

「……………」

おいおいおいおい

「お前らあゝ。生きてるかゝゝ」

「い……、一騎……。覚えてろ……。よ。この借りは……。必ず……。かえ……。す……。」

……………うん。

とりあえずは、大丈夫そうだった。

「フウ」と、俺は肩を撫で下ろす。

だが、

そんな俺の背に嫌々な悪寒が走った。

不吉なモノを感じとり、俺はゆっくりと窓に首を向け、下方に視線を移す。

「マジかよ——！」

廊下の窓から外を覗き込むと、横一列に並んだ弓道部が、今俺がいる4階に矢の狙いを定めていた。

しかも、既に矢を引ききっている《会》の状態で。

「射て——っ」

そして矢が放たれる。

数え切れないほどの矢が戦国合戦さながらに、俺が外を見下ろす4階の窓を目掛けて飛んできた。

「オイオイ、反則だろ」

悪態を洩らしつつ、俺は大急ぎで真横の教室に逃げ込んだ。

ピシャツと戸を閉めると同時に、何十枚のガラスが割れる凄まじい音が扉の向こうで鳴り響く。

「あゝあ。誰が弁償するんだか？」

莫大な請求書の行く宛を想像しながら、そつと背中を扉に預けると、不意に俺の身体を影が包み込んだ。

「いらっしやゝい」

「はあ？」

何事かと顔を持ち上げると、そこには超巨大なハンマーを振り上げた巨躯の男子が笑って俺を見下ろしていた。

しかも何故か女装しウェイトレスの格好で。

正直、はつきり言って、間違いなく、万人共通で……

不気味だ

「スイマセン。間違えました」

「まあまあ、そう言わずに。お客様、ご注文は」

「……………じゃ、じゃあ、小倉パフェを一つ」

「へい、まい、どっ」

とりあえず、出てきたのは俺が注文した小倉パフェじゃなかった。一撃必殺の威力を込めたハンマーが俺の頭蓋目掛けて降り下ろされる。

「注文と違っだろっ」

「うるせえ。小倉パフェだと？ 似合わねもん頼んでんじゃねえ」

「こらこら、お客『様』はどこいった？」

ギリギリ飛び退いた俺の脇で、教室の床が粉々に砕け散った。
あつぶねえ、一歩間違えばあの世行きだぞ！

「コラアアー、殺す気かつ！？」

「あつたりめえだー」

「即答かいっ！？」

イラつき半分、興奮半分の好戦的な笑みを洩らし、即座に俺はハンマーを振るう男子目掛けて攻撃を開始した。

破壊力抜群とは言え、超重量ハンマーの2撃目は遅い。

俺は刀の柄頭を男子の脇腹に決り込む。

しかし、その攻撃はあくまで敵の体勢を崩す『罠』。

本当の狙いは崩れる体勢を支えようとして開かれた下半身だ。

腹部への一撃と共に男子の背後に回り込んでいた俺は、その無防備な股間へ、脚をすり上げた。

「グウオキヤ」

変な奇声を上げて、股間を押さえ崩れ落ちる男子。

ちよつとやりすぎた……かな？

「まあ、勘弁しろよ」

一応謝りながら振り返り、俺はギョツと目を見開いた。

振り向く俺の前には、今後ろで情けない格好をしている男子と同じウェイトレス姿に身を包み込んだ女子と、こっちはちゃんとウエィターの格好をした男子たちがとびっきりのスマイルを振り撒いていた。

「「いらつしやいませ、お客様。ご注文はいかがなさいますか？」」

「じゃ、じゃあ。スーパ―小倉DXパフェを一つ……」

俺の注文を受け、彼ら（彼女たち）はまたまたとびっきりの笑顔を振り撒いて、

「かしこまりました。お客さ、まっ！」

周りにあつた椅子や机を一斉に投擲してきやがった。

彼らの姿を俺の視界から遮る机&椅子のパラダイスが、死の砲弾

となつて容赦なく飛来する。

おいおい、一発でも入りや死ぬぞ。マシで。

不満の言葉を呑みこみながら、俺はすぐさまこの危険極まりない攻撃の迎撃体勢を整えた。

襲いくる投射物の嵐に俺は素早く《神楽》を鞘に収め、近くにあった机をひつ掴み、力いっぱい前方へ投げつける。

雷が落ちたような凄まじい破砕音が轟き粉々になった木片が宙を舞い、捉えそこなつた机や椅子が、なぜか狙われたように股間を抑え蹲る男子生徒に降り注いだ。

……よし。

無視しよう。

俺は更に2・3個の机と椅子投げつけながら、舞い散る木片の間から垣間見える敵の数・位置を確認する。

「男子6、女子……4か」

敵の位置を把握した俺は、両腕をポケットの中に突っ込み、指先で掴んだソレを呆然と空中で爆砕する学校備品を眺める男子達へ投げつけた。

俺が投げたのは、先ほど北馬が使用していた毒付きの手裏剣だ。

手裏剣は飛び散る木片の間を縫うように飛び、男子たちの腕や脚に次々に突き刺さる。

瞬時に毒が体内を巡り、自由を奪われた男子たちが次々とその場に崩れ落ちた。

その光景に息を飲むウェイトレス集団。

俺は既に彼女たちの背後だ。

教室の反対側に回り込み、彼女たちの首筋に若干弱め速度早目の手刀を打ち付ける。

ウェイトレスとウェイター。

その両方が崩れ落ち、全員のリングが割れたのは、ほぼ同時だった。

「よしー。ようやく、一区切りだな」

周り敵がいらないのを確認し、俺は少しだけ息を着く。

しかし、それはあくまでも小休止だ。

目には見えないが、足の裏からは下の階にいるあり得ない数の殺気が伝わってくるし、耳を澄ませば廊下からの息を殺し俺を待つ生徒たちの僅かな息遣いが聞こえてくる。

「さすがに、これ全部を黙らせるのは骨だな」

まあ、負ける気も無いけど。

そこでふっと、俺は思考を巡らせた。

対人ミサイル、火の玉、矢、ウェイトレス&ウェイターetc。

ふざけているようにも思えるが……

俺は感覚を研ぎ澄まし、両隣の教室を探る。

そこに敵は配備されてなかった。

「俺は、この教室に誘導されたいだな……」

独り呟き、俺の思考は更に速度を上げて情報を整理する。

「俺の攻防とそのクセを捉えた兵の配置と奇襲の方法。次の手に移る準備の迅速さ……。それで、我が強いコイツらをまとめることができる統率力」

得られた情報と現在の状況を咀嚼し飲み込んだとき、

「……そうか、アイツか！」

当てはまるヤツは一人しかいなかった。

「そうとわかりや、やることは一つだな」

俺は不敵な笑みを顔に刻み、筋肉を緊張させながら最早廊下の殺気を抑え込められなくなった扉に目を向け……

「オリヤーッ」

一足飛びにその扉を蹴破った。

「ん？ つな！ グアッ！」

俺が蹴破ったドアの真ん前に陣取っていた連中が、吹き飛ばすドアに巻き込まれ、まとめて壁に叩きつけられる。

さすがにこんな登場は予想外だったらしく、目を丸くしてただた

だ呆ける生徒たち。

「さて、と」

そんな彼らを、俺は余裕をもって見渡した。

そして確信する。

巧妙に人員を割り当てているが、俺が目指そうとしている通路の方が配備されている戦力は上だ。

「よし、大将狩りとシヤレこむか」

ぼちぼち戦意を取り戻し始めた生徒たちが動き出す前に、俺は《神楽》を鞘から解き放ち、目的地へ向け自身の体を疾風に変えた。

一番手前にいた男子生徒に峰打ちを決め、その隣で短刀を構える女子に足払いを食らわせる。崩れる二人の背後にいた生徒が持つ三節棍^{せっこん}を奪い取り、俺の動きに付いてこれず、出鼻を挫かれた数名を一気に眠らせた。

「く、くそ」

生徒たちが悔しげに怨嗟吐き出し、各々の武器に手を掛ける。

でも、それをわざわざ待つほど、俺もお人好しじゃない。

三節棍が空中を踊り、武器に手を掛ける生徒たちの手首を次々に打ちすえる。手首を押さえながら蹲る彼等を眼に収めつつ、俺は用無しになった三節棍を後方で刃を降りかぶる生徒たちに投げつけ、ついでに横手にいたメガネ男が持っていた閃光弾をむしり取った。

「おっ、こりゃいいや」

安全ピンを抜き、閃光弾を放り投げる。

目を焼くまばゆい閃光と轟音が辺りを包み込み、一帯にいた生徒が一斉に眼を閉じ、身を竦ませた。

大将狙いで行くなら、わざわざ全員を倒す必要はない。

「体力は温存しねえとな」

「ク、クソォー。きたねえぞ、一騎」

「あのなあ……、お前らが持ち出した武器だろ」

なんとも自分勝手な言い分に辟易しつつ、俺は無力化した生徒たちの脇を縫うように駆け抜ける。

まあ、こんな感じなら俺も楽でいいんだけど……

「そう楽もさせてくれねえーよな」

俺は目の前に立ちはだかる、他の生徒とは明らかに威圧感の違う二人の男子を視界に収め、くがみ・みきじこ呟いた。

「Bランク。九神流槍術、九神幹彦」

「同じく、Bランク。会津双剣流、会津あじ・まじ誠」

「「参るっ！」」

小細工抜き。

真っ向勝負を仕掛けてきた二人組に、俺の顔に歓喜の笑みが零れた。

「はっ、Bランクの2トップか。おもしれえ」

俺は更に速度を上げ、油断なく武器を構える二人に真っ向から突っ込んだ。

「流石はSSランク。潔しっ」

先に仕掛けたのは槍使いの九神だった。

寸分違わぬ角度とタイミングで、槍の矛先が間合いの外から伸びてくる。俺はその矛先が身体を貫くスレスレで体を槍の柄に滑らせるようにかわし、敵の懷に潜り込んだ。九神は咄嗟に槍の手元の部分で俺を打ち倒そうとしたが、その時既に、俺は九神に峰打ちを食らわせた後だった。

「み、見事……」

敗北を認め、それでも満足げに微笑みながら倒れる九神。

その笑みを俺の眼が捉えると同時に、上方から片手剣の刃が俺に襲いかかってきた。

俺は即座に《神楽》を引き戻し、その一撃を受け止める。けれど……

下方の死角から、俺の予想を裏切るもう一本の片手剣が掬い上がってきた。

視界の端に勝利を確信した会津の笑みが映る。

「一騎。覚っ……」

「するわきゃ、ねえだろ」

会津の勝利宣言を慟哭で遮り、俺は更に加速した。

一本目の太刀を支える《神楽》から片手を放し、腕の皮膚を浅く斬りつけられながら、空いた右手で会津の顔面を鷲掴みにして思いっきり壁に叩きつけた。

「がはっ」

会津が苦しげに肺から酸素を吐き出し、背中を壁に預けたままズルズルとその場に座り込んだ。

「よしっ」

Bランクの二強を撃破し、俺は小さく拳を握る。

しかし、二人を倒しても安心する暇はまったく無かった。

廊下のすぐ奥ではローブに身を包み、杖を構える女魔術師たちが今まさに詠唱を終え、術を発動しようとしている真っ最中だ。

「ったく。次から次へと」

俺は勝利の余韻も味わえないまま、すぐさま魔術師へ飛び出した。

だが、

「ちっ！」

魔術師たちも握る杖の先端から、怪しげな光が湧き上がる。

すでに詠唱を終えた魔術師たちとの距離は、とても間に合う距離じゃない。

そう判断した俺は、近くで伸びている男子の傍らに転がるメイスを拾い上げ、魔術師たちの上に設置された蛍光灯目掛けて投げつけた。

バチバチッという音と共に蛍光灯が砕け散り、ガラスの破片が降り注ぐ。

「っキャッ」

集中力を無くし悲鳴を上げる彼女たちの傍らを、俺はまさしく風の如く走り抜けた。

そんな俺の背後で小さな小爆発が起こった。

いったん足を止め背後を振り返ると、それは女魔術師たちの魔法が暴発した音だった。

しかし……

「ばぶ——、ぶあぶう——」

ローブの中から這い出てくる、俺に熱い視線を送ってくる赤ん坊たち。

いったいこいつら、どんな魔法を使おうとしたんだ？

「喰らわなくて、本当に良かった」

心の底から安堵を吐き出し、俺は再び駆け出した。

そしてお待ちかねの階段なわけだが……

「ファイアー」

「やっぱりかいっ！」

再び俺目掛けて対人ミサイルが飛んできた。

しかし、今度は冷静にその機体に《神楽》を真横から滑り込ませ、俺は鮮やかに信管部分を火薬から切り離し、お返しとばかりにミサイルを投げ返した。

「……どわあ————」

絶叫が階段に木霊し、科学部の連中が逃げ惑う。

対人ミサイルはそのまま階段の踊り場に、さながら前衛オブジェのように突き刺さって止まった。

「ざまあーみろ」

俺は科学部の連中に捨て台詞を残し、階段へと眼を向ける。

目指すは上。

俺は三段飛ばしに階段を駆け上がる。

そこにもう兵はおらず、俺は階段を駆け上がり屋上ドアを蹴破った。

屋上の人影は2つ。

一つは地面に寝転がり

もう一つは屋上のだ真ん中で俺を待ち構えている

俺は迷わず疾走。

悠然と屋上に立つ北馬は、笑って《神楽》の一撃を迎え入れた。

「そうか。さっき俺が倒したのは、お前の影武者だったんだな」

俺は屋上で横たわる北馬をチラッと目を向けて、目の前で腰を落とすもう一人の北馬を見下ろした。

「うん。似てるでしょ」

「ああ。ホント、瓜二つだ」

見分けのつかない二人を交互に見返していると、北馬が悔しくて堪らないといった口調で話しかけてきた。

「あゝあ。これで本当に負けちゃったな」

左腕の割れたリングを見ながら、悔しそうに足をバタつかせる北馬。

なんとも、気の抜ける姿だ。

「ホント。お前はしつこかったな。何でそんなに俺に固執したんだ？」

「ブブー。それは答えられません。忍者としての守秘義務を執行しまゝす」

両手で口を覆い、北馬は断固抵抗の構え。

あれ？

コイツこんなキャラだっけ？

そんな違和感を感じながら、俺は北馬の口を割らせるとおきの方法を思いつき、キュピーン眼を光らせた。

「ほゝくゝまゝ」

「な、何？ 萩原君」

動揺する北馬に、俺は満面の笑みを湛えて口を開く。

「勝者の権限、忘れちゃいないよな」

「あつ！」

俺が何を言いたいかを理解し、北馬が「しまった」と顔を歪ませた。

「もゝ。ズルいな、萩原君は」

「ズルいも何もないだろ。んで、何でそんなに俺に固執したんだ？」
もう一度俺が訊ねると、北馬は観念したように小さく笑い、俺の眼をその大きな瞳で真っ直ぐに見据えて答えた。

「単なる自己満足だよ。君に勝ったとき、僕は君に……」

「うんうん」

「君に……告白するつもりだった」

はい？

「はあ？」

WHY?

しばしの沈黙が辺り一帯を支配する。

「え」と……。悪いが、俺にそっちの趣味は……。イデッ」

なんかしらんが、俺は思いつきり脛を蹴飛ばされた。

理不尽な蹴りに俺が抗議の視線を向けると、北馬は唇を尖らせ、拗ねるように俺のことを睨んでいた。

「な、何だよ？」

⌈
⋮
⌋

訳が分からず訊ねると、北馬は無言のまま、目だけで不満を猛主張してきた。

不機嫌になり、黙りこむ北馬。

そして、何かを決意したように忍装束の胸元を掴むと、思いつき
り自分の胸元をはだけさせた。

「ああ！？」

い
い
つ
!

っ
う！
？

ええ~~~~~

おおっお！？？！

未知の光景だった

「な、
ななな、
な」

開いた口が塞がらない。

誰か教えてくれ？

なんで晒しを巻きつけた北馬の胸が、あんな女子みたいに膨らんでるんだ？？

「そ、そうか。やっぱりさっき倒した方が本物で……ウゴッ！」

「あんまり人を馬鹿すると、ボコボコのメチャクチャに殴るよ」

笑顔のまま鼻っ柱に繰り出された北馬の鉄拳のお陰で、俺はこれが夢でないことをようやく理解した。

「い、時から？」

「最初からだよ。——もう、本当に気付かなかったの？」

顔を赤らめながら胸元を正す北馬に、俺は一瞬ドキッとしながら、北馬の質問に素直に答えた。

「本つつつつ当に気付かなかった」

「まったく？」

「まつつつつたく」

「これっぽっちも？」

「これつつつつぽっちも」

「……ハア……」

北馬の重い重い溜め息が洩れ、辺りが沈黙に包まれる。

……情けない話だが、俺はその沈黙に我慢出来なかった。

「何で教えてくれなかったんだよ？」

俺が訪ねると、北馬はビシッと指を二本立てて答えた。

「理由は二つ。一つは、男の子だなんて勘違いされる悔しいことを、女の子の方から訂正出来ると思う？」

「あゝ、確かにできないわな。って、男装してたお前が悪いんじゃないのか？」

「とつつ」

「イテッ」

理不尽な手刀が俺の脳天に突き刺さった

「口答えしない」

笑顔で今度はクナイを準備し始めた北馬に、俺は頬を引き攣らせながらこっちの話を切り上げた。

「……じゃあ、もう一つは」

「もう一つは、どうせなら君と対等に闘って、それで勝った時に告白しようと思ってたから。だって、萩原君。女の子と闘うときは本当に手加減するでしょ？ 相手が下のランクならなおさら。知ってるんだよ、萩原君が女の子と闘うときは、絶対に痕が残るような攻撃をしないこと」

「ああ~~~~~……、バレてたか」

「バレバレです」

頭を掻きながら返すと、北馬は小さく笑いながらと頷いた。

「それに、手加減抜きを君を倒したら、ボクは君の中で特別な女の子になるから。……でも、それも終わっちゃったね」

俺に向けていた視線を空に向け、少しだけ哀しげな顔をする北馬に、俺は髪の毛をさらに掻きむしりながらぶつきらばつに口を開いた。

「おい、北馬」

「ん、何？」

「忍者って言うのは『耐え忍ぶ者』って書くんだろ」

「え、ああ。うん。そうだけど……」

「だったら……」

俺はそう言いながら、北馬の髪をクシャッと撫ぜた。

「だったら、こんなところで諦めないで、何度でも向かってこいよ。卒業しようが、いつでも相手してやるからよ」

「っえ？」

俺の言葉に、北馬は呆けたように口を開いたまま固まった。

「……それは、告白成功ってことでもいいのかな？」

俺の手を払いのけ、気丈に微笑む北馬。

俺は肩を竦めながら、払いのけられた手で一発、北馬にデコピンを食らわせて、

「それは、また別問題だな」

と、答えた。

北馬はおでこを擦りながら何か言いたげに俺を睨め付けてきたが、俺はそれを無視して振り返った。

さすがに、これ以上一緒にいると、俺も変な気が起こりそうだったから。

そして、最後に。

殺気が消え去った屋上の扉のノブに手を掛ける俺の背に、北馬の震える声突き刺さった。

「ホン……トに……ズルいな、萩原君は。……泣かない、って決めたのに……」

第2章 天空食料争奪戦

「はあゝ。まさか、北馬が女だったとはなあ」

北馬と屋上で別れた俺は、衝撃の事実を引きずりながら、よく整備の行き届いた校舎の中庭を歩いていた。

「あー、ダメだダメだ。今は闘いに集中しねえと」

俺は軽く頭を振り、混乱する思考を切り替え、体の具合を確かめる。

北馬のクイナのおかげで制服は所々破れ、腕や足に裂傷が多々あるが、まあ戦闘に支障をきたすほどでもない。

総合的に言つて、全然問題はないんだけど……

グキョルルル

「いい音したな」

時刻は一時二十一分

昼食抜き身としては、とてつもなく腹が減る時間帯だ。

ぐきゅるる、きゅるるる

「……切ない」

切なすぎる腹を擦る俺の耳に、突如としてけたたましいプロペラ音が聞こえてきた。

「な、なんだ？」

意味も分からないまま音の方に顔を向けると、校舎と校舎の間から覗く空に、一機のヘリコプターが飛んでいた。

「豪華だなあ、おい」

今更ながらこの学園の財力に感嘆を洩らす俺の耳に、先ほども聞こえてきた女子生徒の声が響いてきた。

『はいはい。卒業生のみなさん。調子はどうですか？ バトルに勝つ人負ける人。思いを伝え春が来る人、玉碎する人。さまざままだと思いますが、そろそろお腹が空いてきた頃ではないでしょう』

か？」

俺の心を見透かしたようなナレーションに、またまた俺の腹が激しく自己主張を始めた。

『そんな卒業生の皆さんに、とっても素敵なプレゼント。“腹が減っては戦ができぬ”がコンセプトの我が桜花学園各売店及び食堂のご厚意により、只今から卒業生の皆様に、食料の配給を開始します』

配給？ 食料の？

ナレーションの言葉と上空のへり。

嫌な予感がした。

「ま、まさか……」

ちなみに、この学園で起こる“嫌な予感”は、ほぼ100%現実となる。

もう七不思議と言っていいほど、それは確定事項だった

『それでは皆さん、頑張つて食料をキャッチしてくださいね』

底抜けに楽しそうな声と共に、上空で飛翔するヘリコプターの扉が開き、そこから売店のおばさんたちの手によって大量の食糧が学園に撒き散らされる。

「マジでやりやがった！」

理性では驚く俺だったが、悲しいかな、本能の方はその落下を待ちきれないと盛大な声を鳴らした。

「……つま、いっか」

俺はもはや限界まで切羽詰まった腹の虫を無理やり黙らせ、空より降り注ぐ昼飯目指し駆け出した。

聳え立つ校舎の壁に向かって疾走した俺は、その速度のまま跳ね

上がり、ベランダの手すりを踏み台に、一気に屋上まで舞い上がる。そして、スタッと屋上に着地した俺の鼓膜を、盛大な叫び声が叩いた。

「メシッ」

「げっ!!」

ボタンと勢い良く開かれる屋上の扉。

その向こうから、腹を空かせた魑魅魍魎が現れた。

そして辺りは戦場と化す。

屋上に降り注ぐさまざまな種類のパンを獲得せんと、生徒たちの目が血走った。

「俺の」

「私の」

「「ものだーっ」」

屋上になだれ込む人、人、人。

瞬く間に人気のパンの争奪戦が始まった。

俺も遅れを取るわけにはいかない。

「飯抜きだけは勘弁だっ」

心からの叫びを吐き出し、俺は視線の標準を降り注ぐ食料に合わせた。

そして、食料を奪い合う生徒たちの中へ疾走する。

一番手前で落ちたパンを拾っていた男子の背を踏み台にし、狙いをつけていた焼きそばパンをキャッチ、そのまま体を無理やり捻り、ちょうど良く近くに落ちてきたツナマヨと焼き鮭のおにぎりをつかみ取りポケットの中へ、そして袋がちぎれんばかりにベーコンエッグパンを奪い合う男子の肩に着地、崩れる足場をもとめせず、俺は再び上空に跳び上がる。

高度が上がる中、俺は先ほど掴み取った焼きそばパンの袋を開け、口の中に押し込む。そして、ついではかりに落ちてきたお茶のペットボトルをつかみ取り、親指で弾いてキャップを開け、口の中の焼きそばパン共々胃の中に流し込んだ。

「ぷはっ」

うまい！

ただの焼きそばパンだけど、やっぱりこの学校のクオリティーは高かった。

「さてと次は……。って、どわあっ」

次の獲物を探し着地する俺の背後から、俺の不意を突く槍の先端が突き出され、その一撃で破けたポケットからおにぎりが零れ落ちる。

だが俺を襲ったのは、槍だけじゃない。

既に食料の調達を切り上げた面々が、その鋭く研ぎ澄まされた闘志と各々の武器の矛先を俺に向けていた。

「「うおおおおーっ」」

「お前らなあ、飯ぐらいゆっくり食わせろよ」

雄叫びを上げ、地面に落ち残念な姿になった食べ物と踏み荒らし向かってくるそいつらに、俺はため息交じりに呟きながら疾走した。手に持ったお茶のペットボトルを残りのポケットに仕舞いつつ、先ほど俺の背に槍の先端を突き刺してきた槍術師の男子の懐に一瞬で潜り込み、真下からそいつの下あご目掛けて掌根を掬い上げる。意識を飛ばされ空中に吹き飛ばされる男子。その姿を最後まで確認せずに、俺は振り返り、抜刀した《神楽》を踊らせる。大気を貫く銃声と共に、俺に吐き出された銃弾を全て叩き落とし、俺はちょうど近くに落ちてきたおにぎりを《神楽》を握る右手で器用に掴み取りつつ、横手から女子が振り降ろしてきた短剣を奪い去り、前方でリロードを完了した男子へ投げつけた。

銃を構える男子は慌てて飛んでくる短剣を持ち前の銃で撃ち落としたが、その時すでに俺はそいつの背後だ。

「がはっ」

首筋に手刀を浴びせ銃を手にするその男子の意識を遮断しつつ、俺はおにぎりを口の中にねじ込み、咀嚼する。

そして、ポケットに入れておいたお茶で口の中のモノを無理やり

流し込んだとき、ようやく最初に顎を打ち抜いた男子が、屋上の地面に倒れ込んだ。

俺の背筋を撫ぜる悪寒。

鼓膜を引き裂くような雷鳴。

慌てて飛び退く俺が今まで立っていた場所の床が爆音と共に吹き飛び、下の階の教室が露わになった。

「惜しい」

「『惜しい』、じゃねえだろが、このドアホ」

背後で悔しがる杖を構える女子の集団に激昂を吐き出しつつ、俺が反撃の体勢を整えた途端、辺りがいきなり騒がしくなった。

「あつ、おい。あれを見る」

一人の男子が叫び、上空を指差す。

その場にいた全員が、自分に向って武器を構える相手を警戒しつつ上空に目を向けると、カツと目を見開いた。

「あ、ありゃ！」

遥かな上空。

俺たちに向けて食料を撒き散らすヘリコプターのドアで手を振るおばさんが手に持っていたのは、月に一度、しかも限定百個しかない桜花学園の超超超人気スイーツ、『天響の焼きプリン』だった。

「いくよー。ほらあ」

おばちゃんの声と共に、『天響の焼きプリン』が青い空に投げ出される。

その瞬間、俺を含めその場にいた全ての生徒が、バトルを放棄し、『天響の焼きプリン』目掛けて駆けだした。

「『渡すかーっ』」

男女入り乱れての『天響の焼きプリン』争奪戦。

風に流されるプリンを追い、生徒たちが次々と今いる校舎の屋上の端から、隣の校舎の屋上へ飛び移る。

目指すは『天響の焼きプリン』ただ一つ。

「どけえーっ」

前を走る人ごみの間を縫い、それでも遅いと感じた俺は、目の前の男子の背中を踏み台に高く跳躍し、一気に集団の先頭へ踊り出た。
「コラー！ 何しやがる、一騎」

「非常事態だ。気にするな」

「何だとっ！ てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞっ」

背後から聞こえる罵声も何のその。

俺は脇目も振らず『天響の焼きプリン』目指して駆け抜ける。

だが、そう易々と辿り着けるはずもなかった。

轟く銃声。

大気を焦がす爆炎。

投擲される幾多の刃。

「げえっ！」

一瞬振り向いた俺の背後は、戦意よりも殺意を身に纏った生徒たちの攻撃に覆い尽くされていた。

「洒落になんねえぞ」

俺はチラッと『天響の焼きプリン』を視界に収め、さらに屋上の端から次の屋上の飛び退きつつ、『神楽』を鞘に収め有らん限りの力で垂直に飛びあがった。

俺のすぐ足もとを掠め、生徒たちの殺気が通り過ぎて行く。

そして、俺はすぐそこまで迫った『天響の焼きプリン』目掛けて手を伸ばした。

「貰ったっ！」

俺の叫びが空中に木霊する。

だが、その後を追ったのは、『天響の焼きプリン』を掴み取った歓喜の声ではなく、不意に吹き荒れた突風に体勢を崩される、俺の情けないテンパった声だった。

「どわあああ！」

『天響の焼きプリン』はあとちよつとのところで俺の指先を掠め、意志を持つかのように吹く風に攫われる。

一方、突風により完全に体勢を崩された俺は、それでもなんとか

身を振り、真下の屋上の床に着地した。

「っと、どこ行った？ 俺のプリン」

俺は急いで『天響の焼きプリン』を探す。

そして、『天響の焼きプリン』はすぐに見つかった。

俺の手から風に奪われた『天響の焼きプリン』は、そのまま空中を遊泳し、一人の男の手の中に納まった。

「残念だったね。一騎」

「かおる薫っ」

髪を軽く伸ばし、優しい顔つきで微笑む長身の眼鏡を掛けた知的な男。

Sランク『千仙せんせんの風士』椎名しいな薫が、手の上で『天響の焼きプリン』を弄びながら、俺に「悪いね」と笑いかけてきた。

「ずるいぞ、薫。今の、完全に俺のもんだっただろ」

「ずるくないさ。それに、これだけは渡さないからね」

『天響の焼きプリン』を掲げて見せる薫に、俺は小さなため息をついた。

「まーた、妹の頼みかよ。いい加減、兄き離れさせた方がいいぞ」

「大きなお世話だ。それに、あいつが兄き離れできないって言うより、僕が妹離れ出来てないだけだからね」

「笑顔で言っな、笑顔で」

俺は呆れながら、ゆっくりと《神楽》を抜刀し……

悪役顔負けの不敵な笑みと共に、『天響の焼きプリン』に保護用の風を纏わせる薫を睨みつけた。

「とにかく、プリンは返してもらっぞ」

「出来るものならね」

《神楽》の刀身に反射した太陽の光を受け止め、『天響の焼きプリン』を上空に放った薫は、笑顔のまま俺に負けないぐらいの闘志の風を身に纏った。

風 対 刀

先手は……

薫だった。

薫が無造作に腕を振るう。

その腕の軌道に従い、強烈な暴風が吹き荒れた。

俺は暴風に身を剥がされまいと《神楽》を屋上に突き刺し、耐える。

「っ！」

そんな俺の二の腕が、何の前触れもなくスパツと切れ、鮮血が制服に真っ赤な緒を引きながら流れ出した。

それは、一度だけじゃない。

絶え間なく吹き荒れる暴数の中、次々と俺に向かって放たれる真空をもつて敵を切り裂く不可視の刃。

《カマイタチ》が容赦なく俺の肌を切り裂き、瞬く間に俺の制服を真っ赤に染め上げた。

「っち」

堪らず俺は、《神楽》をコンクリートの床から引き抜いた。

その途端、俺の身体が強靱な風の腕に掴まれ、翻弄される。

足が浮き、上も下も分からなくなるままに俺の身体は上空へと誘われた。

高い、そして早い。

あっという間に、俺の体は薄い雲を突き抜けた。

「な??」

突然、俺の身体を支配していた風が止んだ。

「うわあ、すげえな」

俺の眼下に、かなりの高度があるにもかかわらず端っこが全く見えない広い学園が映し出される。

そして、その広さに圧倒された次の瞬間。

「うわっ」

俺の身体は、風の腕から重力の腕にパスされた。

改めて確認すると、今俺のいるのは洒落にならない高度だった。

「おいおい、どうしたもんか」

俺は重力に引き寄せられるままに落ちる中、割と冷静に考えていた。

基本的に、俺は魔術のスキルはない。

このまま落ちれば、ただただコンクリートに叩きつけられるだけだ。

「さすが。落ち着いてるね、一騎」

呑気な声が俺の耳を撫ぜる。

ふと目線を横に向けると、持ち前の風で自由自在に空を飛ぶ薫が、俺に悪意たつぷりの笑みを向けていた。

「てめえ……」

「そんな怖い顔して、僕のこと気にしてる暇あるの？」

「うるせえ。誰のせいだと思ってやがんだ？」

「僕」

「このっ」

笑顔で即答する薫に、俺のこめかみがピクッと痙攣した。

すると薫は、クスクスと俺を聞き分けのない子供を見るように笑った。

そして……

「そんなに意地張らないでさあ……」

次に続く薫の言葉に……

「素直に、助けてって言えばいいのに」

こめかみの血管がブチ切れた。

「誰が言うかつ」

俺は無理やり腕だけの力で薫目掛けて《神楽》を振るう。

だが、薫はその斬撃を易々と避け、そして、小さく肩を竦めながら、

「じゃあ先に待ってるね」

と手を振って一気に地上まで降りていた。

その姿を眼で追いながら、俺は地上、正確に校舎の屋上との距離

を測る。

今の俺の落下速度からして、着地までの時間はおよそ26秒。

「さて……。ホントに、どうしたもんか？」

呟きながら、俺の頬に滲んだ汗が垂れずに額に昇る。

薫にはああ言ったものの、正直手がない。

と、その時。

「そう言えば、この建物って……。それにこの位置」

俺の中で、何かが閃いた。

後はタイミングだけだ。

残り、10秒

俺は背中から落ちていた身体を振り、頭が下になるように体勢を整えた。

残り、7秒

春の暖かな陽気の中を、もはや凄まじい速度になった俺の身体が落下する。

残り3秒。

チラツと薫に目を向けると、流石はSランクの實力に相応しく、まったく油断なく俺の動きを観察していた。

残り、1秒

俺は《神楽》を握る右腕の筋肉を限界まで緊張・引き絞る。

残り、0.57秒

「砕けるっ！」

俺は《神楽》の強度だけを信じ、無我無心でその刀身を屋上のコンクリートの脆い所に突き刺した。

盛大な音と共に、俺たちが闘っていた建物、学園業務員用宿屋の屋上の床に大きな穴が空いき、俺の視界が崩壊するコンクリートの瓦礫に埋め尽くされる。

「ふう。……思った通りだな」

そして俺の身体は、崩れた屋上の真下にあつた就寝具を収納する倉庫に収められた、毛布に受け止められていた。

「よかったー、前にここでバイトしたことがあって」

心から安堵のため息をつき、俺は布団の中から身を起して、倉庫の天井に空いた太陽の光が降り注ぐ穴から再び屋上へ跳び上がる。

そこでは、薫が「呆れた」と目を丸くして俺を見つめていた。

「ホント。どこまで悪運が強いんだ？ 一騎は」

「へっ、悪いな。俺の身体は神や仏のマンションになってんだよ」

「意味分かんないって」

「大丈夫、俺自身も意味わかってねえから。それより、今度はこっちから行くぞ」

小さく笑いながら首を横に振る薫に、俺はあれだけの衝撃を受け止めてなお、刃零れしない《神楽》を構え、真っ向から斬り込んだ。俺は自身の身体を一陣の疾風に変え、薫との間合いを一気に詰めにかかる。薫は掌を突き出し、そこから生み出した暴風を操り俺の特攻を防ごうとするが、それでも俺は止まらない。俺は牙を剥く荒れ狂う突風を力の限りふり抜いた《神楽》の剣圧で切り裂き、バラバラに霧散する大気の中を更に薫に向けて突っ込んだ。

上空に振り上げ唐竹割りに振り下ろした《神楽》の刀身が、薫の右肩に食らいつく。

だが……

「甘いね、一騎」

「何っ!？」

俺の振り下ろした《神楽》の刀身は、薫がその身に纏った風の鎧によって、右肩の数センチ手前で止まっていた。

忘れていた。

薫はこの《風帝の鎧》でSランクの座に上り詰めた男だ。

そして《風帝の鎧》は卒業生の防御術の中で第二位の鉄壁を誇る技。

「これだから魔術師相手は嫌いなんだよ」

苛立ちを吐き出す俺の身体が、薫の《風帝の鎧》の風に捕らえられる。

停滞する俺の身体。

スツと薫の掌が俺の左脇腹にあてがわれた。

「これぐらいじゃ死なないよね」

腹黒い笑顔で笑いかける薫。

その掌から、極限まで凝縮された大気の塊が俺の左脇腹にねじ込まれた。

「ツガハ！」

腹部に受けた小型台風のような空気の塊に、口から吐血を吐き出しながら俺の身体が吹き飛ばされ、背中から屋上のフェンスに叩きつけられる。

俺の身体を受け止めたフェンスが大きく撓み、俺の口の端が真っ赤な筋が走った。

「ゲホ、ケツホ。ンン……っぺ」

痛みの駆け巡る身体をフェンスに預けながら、俺は口の中に残る血の残滓をその場に吐き捨てて。

そして気合いで痛みと言う警告を発する身体を気力で無理やり黙らせ、俺は身体をフェンスから引き離し、大きく息を吸う。

「スウー、ハー。よしっ」

息が整ったところで、俺は手に握る《神楽》の刀身を、腰に下げた鞘の中に収めた。

「ん？ どうした、一騎。まさか諦めたのかい？」

俺の行為に怪訝な顔をする薫。

俺はそんな薫の戸惑いを十分に理解しつつ、

「んな訳あるかつ」

右手で《神楽》の柄を握りながら、再び薫に向けて跳び出した。薫の顔から余裕が消える。

身体を痛めつけながらも、その速度は先ほどの攻撃を完全に上回っていた。

戦慄に頬を引き攣らせながら、薫が急いで両腕を俺目掛けて持ち上げる。

その両腕から放たれた暴風は、いくら疾風と化した俺の身体でも、簡単に屋上の床から引き離していただろう。

その暴風が、薫の手から放たれていたならだ。

「んなつ！」

薫の口から、驚愕の声が吐き出される。

その掌に集められた風が解き放たれる前に、俺は既に薫との間合いの中に入っていた。

薫の眼が、鞘の鯉口から抜き放たれる《神楽》の刀身を僅かに捉えたとき、

俺の居合はすでに完了していた。

すれ違う俺の背後で、薫が片手で腹部を押さえながら片膝をつく。

「どんなもんだ」

俺が口の端に零れたままだった血を服の袖で拭いながら自慢げに言つと、掌を自身の血で真つ赤に染め上げた薫が、悔しさと恨めしさ、そして込み上がる興奮を内包した笑みを浮かべながら振り返った。

「忘れてたよ、君のその居合術。まさか僕の《風帝の鎧》を斬り裂くなんて。一体、どんな鍛え方をしたらそんな斬撃が生み出されるんだい？」

「年がら年中学園内を歩くたびに暗殺されかけりゃ、いやでもできるようになるぞ」

「……苦労してるんだね」

「ほつとけ」

「クスッ。——でも、今の一撃で決めれなかったのは失敗だったね」

「なんでだ？」

怪訝な顔をして俺が問いかけると、薫は自信に充ち溢れた眼で俺を睨めつけながら、すでに納刀した《神楽》を指差した。

「居合に忒の太刀はない。つまり一撃目を避ければ、君は死に体だ。その瞬間を見逃すほど、僕はお人好しじゃないよ」

薫の言うことは、確かに正しかった。

居合は剣術において最速最鋭の技だが、外れてしまった場合、その後に出来る隙は敗北に直結する。

それに、薫の属性は風。

敵の攻撃に対する防御・回避能力は、他の追隨を許さない。

「そんなこと、分かってら」

そう、俺だって分かってる。

分かっているからこそ、俺は《神楽》の柄に右手を添えた。

「やっぱり、そうだよな」

俺の返答を予想していたように、薫が先んじて両腕を前に突き出し、その両掌に大気を凝縮した。

そして……

俺は居合をもつて、躊躇うことなく薫に斬り込んだ。

その速度は、先の一撃を更に上回る。

薫の風は放たれない。

それは、誘いだ。

だが、俺は迷わない。

俺は更に大きく足を踏み込んで、身体を加速させる。

刹那

《神楽》の白刃が、鞘から抜き放たれた。

銀光を残し《神楽》の刀身が薫目掛けて振り抜かれる。

虚空を切り裂く《神楽》

薫は動いていない。

しかし、薫の操る風が、薫の身体をほんの一步分だけ後方に動かしていたのだ。

完全なる隙。

薫が快心の笑みを浮かべて、両腕の小台風を俺に突き出す。

その薫の視界から、俺の身体が消えた。

「っえ!？」

思わず声を洩らす薫。

俺は速度を緩めず、踏み込んだ右足一本でその場にしゃがみ込み、そのまま薫の身体に身を投げ出した。

しかも、腕に力を集中したことにより《風帝の鎧》の力が弱まり、俺と薫は錐揉みしながらその場に転がった。

鼻の突きそうな距離にいる薫が笑う。

突如として俺と薫の間に吹き荒れる突風。

俺の身体が薫から引き剥がされる。

離れながら跳び起きる俺と薫。

背中に浸り突く汗を感じながら、俺は間髪入れずに間合いを詰める。

それは薫も同様だった。

薫の左腕が持ち上がり、その掌に大気が集まる。

俺はその大気ごと、薫の左手に《神楽》を振り落とした。

集められた大気が割れ、慌てて引き戻した薫の掌に一筋の血線が走る。

——こいつ、まさかっ！

飛び退く薫を追撃せず、俺は手に残る感触をもう一度吟味し、ある確信をもって薫を睨めつけた。

「読めたぜ、薫。お前の《風帝の鎧》。攻撃しているときは、かなり精度が落ちんだろ」

俺がそう問うと、薫は「ばれたか」と小さく舌を出した。

「うまく隠してたんだけどなあ。みんなには内緒にしてよ」

「ヤダ。言いふらしてやる」

「根性悪」

「ほっとけ」

「まあ……いいや。じゃあ次は、こんなのはどうだい？」

そう言つて薫が両腕をそれぞれ左右に突き出したかと思うと、薫を中心として強大な竜巻が発生した。

だが、それで終わりじゃない。

竜巻が次第に収縮し、人型に変わる。

「お待たせ」

そして、身体を風、じゃなく暴風で包み込んだ薫が、初めて体術の構えを見せた。

「なんだ、そりゃ？」

「ああ、ごめんごめん。そう言えば、この技は初めて見せるよね。これは《風神の闘衣》。僕の裏技だ、よっ」

言葉を後方に置き去りにし、竜巻を見に纏った薫が、俺目掛けて突っ込んで来た。

でも速度はそこまで速いものじゃない。

何か裏がある。

薫が拳を突き出す。

それは完全にお互いの間合いの外。

だが薫の拳圧により放たれた風の拳は、間合いの外から俺に迫って来た。

咄嗟に横手に飛び退く俺の後ろで、屋上のフェンスがまとめて空中に吹き飛ばされる。

こりゃ、一発でも貰ったらアウトだな。

遠距離戦では完全に薫に分がある。

俺は極限まで引き絞った脚筋を開放し、一瞬で薫との間合いに跳び込むと、その勢いのまま突撃の速度と上半身のバネをフルに使った《神楽》の切っ先を薫に突き刺した。

もし《風帝の鎧》だったなら確実に《神楽》の切っ先は薫の身体を貫通していたはずだ。

だが、今薫を包み込んでいるのは《風帝の鎧》ではなく《風神の闘衣》。

銃弾をも超える速度で突き出した《神楽》の切っ先が、薫の身体を覆う風に弾かれる。

俺は弾かれた刀身をすぐさま引き戻し薫目掛けて斬り込んだが、やはりその斬撃も《風神の闘衣》の前に弾かれた。

「チッ！」

舌打ちしながら俺は薫から大きく飛び退いた。

そんな俺を追って拳を繰り出してくる薫。

ギリギリで避けた俺の背後で、再びフェンスが突風の腕に掴まれ宙を舞う。

俺は薫の突き出した腕目掛けて《神楽》を掬い上げたが、高速で渦巻く《風神の鬨衣》はいかなる敵も通さない。

しかも、無理な体勢から腕を振り上げたせいで、俺の動きが鈍る。次の瞬間、風の中でも微動だにしない眼鏡の奥に光る薫の眼と俺の眼が交わり、俺のどてっ腹に強烈な風を纏った拳が突き刺さった。許容量を超える痛み、一瞬俺の視界が明滅し、俺の足がコンクリートの床を抉る。

だが、俺はその一撃を耐えきった。

「っな!？」

薫がこのバトル中一番大きく眼を見開いた。

俺だって、耐えきれるとは思っちゃんなかった。

ただ、運が良かっただけだ。

そして、俺は薫の精神のブレより生れた《風神の鬨衣》の僅かなほつれを見逃しはしなかった。

弾かれた《神楽》の刀身が再三薫に食らいつく。

「しまった」、と叫ぶ時間すら薫には与えない。

ピキーン

金属が断ち切られる甲高い音が辺りに木霊する。

静寂。そして静止。

薫を包み込んでいた激しい《風神の鬨衣》が、穏やかな春風に変わる。

風の衣を脱ぎ捨てる薫の切り裂かれた左袖から、縦に切り込みが入れたリングが、乾いた音を響かせて、コンクリートに落下した。

「あゝあ。まさか、とっておきの《風神の鬨衣》まで破られるなん

て……。これがSランクとSSランクの実力の差ってことかい？
一騎」

悔しそうに笑いながら、拾い上げたリングを指でクルクル回す薫は、ドツとその場に座り込む俺に訊いてきた。

「アホ言え。SSランクの定員が3人じゃなかったら、間違いなくお前もSSランクに入ってたんだろ」

それは俺の本心からの言葉だ。

それほど、薫は強かった。

背中に汗が浸り付く、勝か負けるか分からないマジバトル。

俺がその心地よい余韻に浸っていると、薫がクイクイツと何やら指を動かし、小さな風を起こした。

風に誘われてきたものの、『天響の焼きプリン』が薫の手の中に収まる。

「はい、一騎。戦利品だよ」

薫はその『天響の焼きプリン』を俺に投げ渡した。

俺は自分の手の中に納まった『天響の焼きプリン』をチラッと一瞥し、

「妹さんに持って行つてやれよ。このシスコン」

薫に投げ返した。

「い、いいの？ 一騎だってコレすごく好きなんですよ？」

「腹ぶん殴られた後に、あんまり食べる気しないっつーの」

肩を竦めながら俺がヒラヒラと手を振ると、薫は「じゃあ、お言葉に甘えて」と言つて、『天響の焼きプリン』を再び風で包み込んだ。

「でも、やっぱりタダってわけにはいかないよ」

「気にすんなつて。今のバトルで、俺はもう腹いっぱいだ」

そう言つて大げさに腹を擦つて見せるが、薫はやっぱり納得いかないといった様子で、首を横に振った。

「一騎つて、嘘つくの下手だよ」

「ウソじゃねえよ、本当に俺は満足だ」

「……じゃあ、せめて。これは受け取ってくれてもいいよね」

早口にそう言つと、薫は俺の返事を待たずに、大きく腕を回した。その途端、俺たちを中心として強風が渦を巻いて吹き荒れる。

そして、その小さな旋風が止むと、一瞬の間をおいて俺たちの上空から、たくさんの食べ物が降り注いできた。

「な、なんだこりゃ」

呆氣にとられる俺を眼の端に収め、小さな笑いを洩らしながら、薫はさらに器用に風を操り、降り注ぐ食べ物を優しく風の腕で捉える。

あつという間に、俺の眼の前には、美味しそうな食山が生まれた。「あゝあ。どうしたんだよ？ コレ」

「別に、どうってことはないよ。本当は罌用に張っておいた風の網に引っ掛かったヤツを集めただけだから。さすがに『天響の焼きプリン』はないけど、よかつたら食べてくれよ。質より量。等価交換手やつさ」

「よし、ノツた。じゃあ、これで貸し借りはなしてことで」

「うん。そうしてくれると、僕も楽だから。ああ、そうそう。たぶん大丈夫だと思うけど、念のため暴風壁を張っておくから。ゆつくり食べるといいよ」

「ああ、そうする。サンキューな」

俺の礼に薫は笑顔で応え、『天響の焼きプリン』を片手にその場を後にした。

第3章 決戦 巨大ロボット!?

「あ~~~~あ、腹いっぱい。満足満足」

俺はたっぷり膨れたお腹を擦りながら、さまざまな倉庫が立ち並ぶ学園の一角を一人歩いて

「さ~て、次はどんな奴か……」

G A G A G A G A G A A A A

俺の言葉は、辺り一帯に突如として鳴り響いた轟音にかき消された。

「な、なんだ？」

続く轟音、揺れる大地。

そして、

ひととき大きい爆音と共に、立ち並んでいた倉庫の一つが吹き飛び、中から校舎よりもでかい巨大ロボが現れた。

おいおい……

「は~~~~、こりやまた」

もう、なんでもありだな。

目の前に立ちあがる意味不明理解不能な巨大ロボ。

その頭部が突然開いたかと思うと、中から拡声機が飛び出し、操縦者である生徒の声が聞こえてきた。

「ハッハハハハハハ、聞こえるかね、一騎君」

「その声は……、誰だ？」

俺の質問に、巨大ロボットのものの見事にズツこけた。

「コラアアア、一騎イ。貴様、この桜花学園が誇る天才発明家を忘れたのかっ」

「うつせえなあ。冗談だ、冗談。もっと音量下げろ、バカ」

まったく、冗談の通じない奴だ。

俺は、おそらく巨大ロボの中の操縦席で座っているであろう、工学部Aランクの『発明狂』きしま・ようすけ木島洋介を思い出し小さく溜息をついた。

「んで、そいつは一体何だ？」

「フッフッフ、聞いて驚くなよ。これこそ現代科学の結晶、超ウルトラハイパーDX桜花君32号だっ」

「ホント暇だな、お前らも」

なんともネーミングセンスの古い桜花なんたらロボを前に、俺は心底ため息をつきながらも、体はいつでも戦闘を行えるように身構えた。

すると、再び桜花君32号の頭上の拡声機から、余裕たっぷり自信満々の木島の声が響いてきた。

「フッフッフ。無駄だよ、一騎君。この超ウルトラハイパーDX桜花君32号には、君の戦闘データをすべて入力しておいた。対萩原一騎のシミュレーションは完了している。君の勝てる確率は0パーセントだ」

「ああ、そうかい」

楽しげに高笑いを響かせる木島にそっけなく答え、俺はゆっくりと《神楽》を鞘から抜き放った。

そして、木島に向けて宣言する。

「けどよお、木島。一つだけ言わせてもらっぞ」

「ん？ なんだい？」

「喧嘩っていうのはな、ぜってえに勝てない奴に勝ってこそ面白いんだよっ」

その言葉が契機となり、俺&桜花君32号のバトルが始まった。

「一瞬でスクラップにしてやる」

その意気込みよろしく、俺はすぐさま桜花君32号の足元に飛び込み、そのくるぶし辺りに銀の軌跡を大気に残す《神楽》を切りこませた。

だが……

「か、硬え」

桜花君32号の外郭の硬度は予想以上で、俺の振るった《神楽》は外面の塗装を僅かばかりはぎ取っただけで止まった。

「ハッハハハハ。どうだね、一騎君。僕たち工学部が開発した新超合金の硬度は？ この超ウルトラハイパーDX桜花君32号を、今までの超ウルトラハイパーDX桜花君シリーズと一緒にとは思わないことだね。さて、今度はこっちの番だ」

頭上で響く攻撃宣言と共に、俺の《神楽》を受け止めた桜花君32号の足が振りかぶられ、圧倒的な質量をもって俺を蹴り飛ばした。「がはっ！？」

なんとか寸前で力を逃がす方に跳びはしたが、殺しきれなかった衝撃に俺の身体が軽々と倉庫のシャッターに吹き飛ばされる。

俺の身体を受け止め、シャッターが鈍い音と共に大きくへこんだ。「っ。こりゃ、ちよつとヤバイかもな」

《神楽》を杖に何とか身を起こした俺は、体の奥底から込み上げる感情に、笑いを堪えることができなかった。

ホント、この学園の奴らは楽しませてくれる。

「どうだい、一騎君？ 超ウルトラハイパーDX桜花君の性能は？ 刃が立たないとは、まさにこのことだろ」

「ホント、よくしゃべるやつだな。ちよつとは黙ってるよ」

憤激を織り交ぜ木島に怒鳴り返してみるが、その言葉はもったもっただった。

初撃の手応えで分かる。

正攻法じゃ、桜花君32号に勝つのはかなり難しそうだ。

じゃあ、どうする？

俺は桜花君32号に目を向けるが、どうにも手は思いつかなかった。

「とりあえず、攻めてみつか」
行き当たりばったり。

結局、このスタイルが一番俺に合ってる。

俺は再び身体を疾風に変え、太陽の光を遮る桜花君32号に向かって、真っ向から切り込んだ。

先ほど同様に懐に入り込み、飛び上がる。外郭の段差を利用し、

俺は一気に頭部へと辿り着いた俺は、その外郭版の板と板の間に《神楽》を滑り込ませた。

てこの原理を利用し、俺はまず外郭の一枚を引っぺがしにかかる。だが、

「無駄だよ」

あざ笑う声が響き、桜花君32号の顔面に張り付いていた俺は、桜花君32号の巨大な手によって背後から掴まれてしまった。

桜花君32号の巨大な手が、ぎりぎり俺を締め付ける。

「この、放せっ」

鋼鉄の手の中で俺が必至にもがいていると、いかにもの分かりの良い声が響いてきた。

「うん、分かってるよ」

「は？——う、うわぁ」

桜花君32号の腕が振り上げられ、俺は思いっきり地面へと投げつけられた。

なんちゅうことしやがんだ！

俺は悪態を洩らしながらなんとか受け身を取り、転げるように地面に着地する。

そして、目線を上げると、

「おいおいおいおいおい」

桜花君32号がミサイルのギッシリ詰まった胸のハッチを開け、俺の方を向いていた。

「ファイアッ」

楽しそうな攻撃の掛け声と共に、ミサイルが俺目掛けて放たれる。「あんにやろっ」

俺は舌打ちしながら、向かってくるミサイルに対して自ら飛び込んだ。

ミサイルが完全に加速する前に下をトップスピードで駆け抜けた俺は、桜花君32号の股をくぐり、背後からその膝を蹴り飛ばす。膝の裏を蹴られ体勢を崩す桜花君32号。

だが、俺は追い打ちをかけることはせず、桜花君32号の背中から伸びる黒いコードに目を奪われた。

「まさか……」

いや、間違いない。

桜花君32号の背中から伸びる太く黒いコード。

「有線かいつ！」

俺は天才でありながらやはりどこか壊れてる木島に辟易のため息を漏らしながら、そのコード目掛けて《神楽》を握る腕を振り抜いた。

バチバチバチバチバチツ

凄まじい電気がショートする音と共に電源コードが断ち切られ、体勢を立て直そうと踏ん張っていた桜花君32号の眼から光が消える。

桜花君32号の巨体が背中から地面へと倒れ込み、重々しい地鳴りが鳴り響いた。

「よし、終わりだ」

意外にあっけなかったな。

どこか肩すかしを食らった俺は、微妙にすっきりしないまま、地面に背を付ける桜花君32号に背を向けた。

ウィーン

「ん？」

背中越しに聞こえる、電子機器の起動音。

「まさか……、なあ」

ゆっくりと振り返ると、再び両眼に光を取り戻した桜花君32号が、倒れた身体を起き上がらせていた。

「おいおい、電源はぶった切ったはずだろ」

「ハッハッハー。甘いな、一騎君。予備電源だよ。たとえ電源コードが切断されようとも、この超ウルトラハイパー桜花君32号は、連続35時間の起動が可能なのさ」

「だったら、初めから電源コードなんていらねえだろ」

「細かいことは気にするな」

「結局それかよっ！」

呆れ交じりに吐き捨て、俺は再び桜花君32号に切り込んだ。

一足飛びに桜花君32号の足下に潜り込んだ俺は、そこ関節部分の隙間に《神楽》の切っ先を突きつける。だが桜花君32号は関節部分の強度にもバッチリで、ガチンという音と共に、俺の腕に鈍い痺れが走った。

俺は仕方なく外郭を諦め、視線を上へ上げどこか内部に入り込めそうなハッチを探す。

そんな俺の頭上から、桜花君32号のトラックのように巨大な拳が降ってきた。

繰り出される拳の質量は驚愕の一言に尽きる。

俺はすぐさま背後に飛び退き、拳の射程圏内から離脱。凄まじい音と共に地面が爆散し、土煙が辺り一帯に舞い上がった。

視界を覆う土煙の中、俺の研ぎ澄まされた感覚神経が、聴覚から知りえた情報を頼りに、俺の肢体に命令を下す。

突如として現れる、小型の無人ミサイル。

事前にその軌道を察知した俺は、自らミサイルに突っ込んだ。

ミサイルの数は、感じられるだけで5つ

俺はすぐさま迎撃の体勢を整えた。

真正面から土煙を吹き飛ばし現れたミサイルの真下に一步で潜り込むと同時に信管を切り飛ばし、返す刀で背後から迫って来たミサイルの後翼を切り飛ばす。そのまま俺の左肩を掠め、バランスを崩したミサイルが地面に墜落し、爆発。辺りの砂埃が吹き飛ばされ、激しい爆風が俺の身体を蹂躪する。

「あつぶね〜」

制服の端を爆風の余波にたなびかせながら、俺は体中の感覚を研ぎ澄まし、見失った残り三機の搜索を開始した。

「見つけた」

叫びながら真横から地面を這うように飛んできた一機を脇で抱

え込み、その軌道を背後から俺を襲うもう一機に定める。

二機分の火薬が爆発し、辺り一帯を熱風が駆け廻った。

残すは一機。

気配は……真上だ。

飛び退く俺の今まで立っていた地面が、轟音と共に爆ぜ割れた。

更に隙間なく撒き上がる砂塵に身を隠し、俺は桜花君32号に疾走する。

その瞬間、俺の耳にキュインという空気が圧縮されるような奇怪な音が響いた。

俺の背筋に悪寒が走る。

カッと目を見開き急ブレーキをかけた俺は即座に背後に飛び退き、無様に地面に転がった。

俺の前方で眩い光がきらめき、地面が粉々に爆散する

「ふえ」

顔を上げた視線の先にあるモノに、俺は安堵が感嘆がよくわからない溜息をついた。

俺の進行先にあった地面に、圧縮した光子を超高速で振動させる、マンガでしか見たことのない光化学兵器のビームサーベルが突き刺さっていた。

「つーか、死ぬぞ」

「大丈夫だ、出力は落としてある。安心しろ、一騎。コレを喰らっても、肉が焼けて、粒子まで分解されるくらいで済むから」

「だから、それを死ぬって言うんだよ」

「頑張れ」

「応援してごまかすな」

悪態をつく俺に、桜花君32号は重々しい音と共に、ビームサーベルを振り押してきた。

さすがにこれはいくら《神楽》でも受け止めるのは無理だろう。

幸い桜花君32号そのものの動作は速くなく、俺は余裕を持って光子剣の切っ先から離脱した。

爆音と共に地面が決れ、土埃が巻き上がる。

俺の目前で砂のカーテンが二つに割れる。

「ぬぁ!?!」

砂のカーテンを切り裂いたのは、光子の剣ではなく、超高压で発射された水の剣、ダイヤモンドをも切り裂くウォーターカッターだった。

またもギリギリで飛び退く俺の背後にあった倉庫の壁が、凄まじい水圧で発射された水により軽々と切断される。

「こんなもん、人間の体なんか一発だぞ」
ゾツとしない光景だった。

「さすがにこのままじゃやべえな」

「つか、死ぬね」

さわやかな声が拡張期から洩れる。

さすがに、イラつとしてきたぞ。

俺は軽く息い、腹を括って桜花君32号へ向けて飛び出した。
上空から振り下ろされる光と水の刃を掻い潜り、一足で間合いを詰める。

神速で《神楽》を振るい、奴の足もとの装甲の同じ場所を連続して斬り付けた。

斬撃に合わせ甲高い音響く。

「くそつ、それでもダメかよ」

数ミリセンチの誤差なく同じところを切り付けたにもかかわらず、足もとの装甲の塗装が少し剥がれた程度で、実質的なダメージはほとんどない。

今更ながらこの学園生徒の技術力に脱帽した。

「一体、どうやってたら壊れんだよ、こいつは」

悪態をつきながら、俺は上空から振り下ろされた鉄拳を僅かに体を捌いてかわし、その拳を踏み台にしてそのまま桜花君32号の腕を駆け上がった。

「甘いつ」

爽快な叫びと共に、俺が駆けあがっている腕の二の腕部分のハッチが開き、中からガトリングがせり上がった。

「やべえ」

連続する銃声が木霊し、空薬莢が次々に排出される。

跳び上がる俺の下方で焦りの叫びが銃弾に引き裂かれた。

ホントに殺す気で来てやがんな。

「上等っ」

ガトリングの銃身を振り下ろす《神楽》で叩つ斬り、再び桜花君32号の腕に着地。

そして、

「これで、どうだっ」

俺はガトリングの出てきた穴へ神楽の切っ先を擦じり込んだ。

小さなスパークが俺の眼の前で炸裂し、焦げ臭い匂いが俺の鼻孔をくすぐる。

桜花君32号の左腕が、ガクンと力無く肩元から垂れ下がった。

「よっしゃっ」

俺の歡喜の雄叫びが辺りに響く。

しかし、これは油断以外の何物でもなかった。

横手から桜花君32号の拳が俺の半身を殴りつけ、尋常でない衝撃が痛みとなつて俺の身体を駆け廻る。

そのまま横手のスッ飛ばされた俺は、なんとか空中で体を擦り、着地。そして、口の中に広がる鉄の味を、唾と共に吐き捨てた。

「ひどいことするな、一騎君。僕の超ウルトラハイパー桜花君32号の左腕をこんなにしてくれちゃって」

「うっせえ。知ったこっちゃねえよ。っーか、ホントにどうやったら壊れんだ？ そのデカブツは？」

袖で口の端に零れる血を拭いながら、俺は更に戦気爛々とした眼で目の前の桜花君32号を睨みつけた。

そして情報を整理する。

とりあえず、硬いのは外の装甲だけ。中なら、どうにかダメージ

を与えられる。

問題は、どうやったら一撃でこいつを止められるかなわけなんだが……

て、あつ！

「いいもん見つけ！」

俺は地面に横たわるある物を見つけ、渾身の笑みを浮かべた。

「ん？ どうした一騎君。そんなに笑って。まさか、今更この超ウルトラパイパー桜花君32号の凄さが分かったのかい？」

スピーカから聞こえてくる憐れむようなその声に、俺はいかにも悪者っぽく笑い、《神楽》の刀身をを水平に構え、

「いいや、見つけたのは。その木偶の坊の弱点だつ！」

全身の筋肉を爆発させて、一気に桜花君32号との間合いを詰めた。

狙うは先ほど連続して斬りつけ塗装が剥がれたその一点のみ。

「くらえっ」

後は、《神楽》と装甲。

どちらの強度が勝るかだ！

そして、その答えはすぐに分かった。

一瞬の硬い手応えの後に続く、断続的なナニかを斬る手応え。

桜花君32号の足の装甲に、《神楽》の刀身が突き刺さっていた。自分の足に刺さる刀を見て、桜花君32号の動きが鈍る。

だが、刺した場所が悪かったのか、微塵も不具合を感じなさそうに、桜花君32号は足を持ち上げ、俺を踏みつぶしにかかった。

俺は刺さったままの《神楽》から手を放し、慌てて上空を影で覆い隠す鋼の靴裏から離脱する。

「ハッハッハッハッハッハ。惜しかったね、一騎君。まさか、あの装甲が破壊されるなんて思ってたけど。でも、これで君の武器はゼロ。最後に笑うのは、やっぱりこの僕なんだ」

「いちいち、演説がうるさいんだよっ」

無駄な演説と吐き捨て、俺はある一点目掛けて足の筋肉の緊張を

開放した。

「ん、つど、どこに行くー騎君」

上空から響く木島の声をまるつきり無視して、俺は桜花君32号の背後に回り込み、そこにあった黒く長いコードを抱きかかえる。

「なっ、まさか」

「その、まさかだつ。くらええええ」

「わっ、や、やめろー」

スピーカーから聞こえてくる制止に耳を貸さず、俺は桜花君32号の脚に突き刺さる《神楽》に電源コードを叩きつけた。

途端、桜花君の中から凄まじい電気がショートする音が響き、体の各所から火花が発生。そして小爆発を繰り返したかと思うと、眩い光と爆音を轟かせて、まるでマンガみたいに桜花君32号の身体が吹っ飛んだ。

「ギャアー」

叫び声と共に欧化君32号の背中ハッチが空き、中から脱出ボットが噴出される

「お、おぼえてろー。ー騎イー」

「やなこつた」

俺は吹き飛ばされパラシュートで降りてくる木島に向かって、辟易しながら呟いた。

第4章 告白パート？

「お~~~~、いって~~~~」

工学部の巨大口ボを撃破した俺は、桜が立ち並ぶ学園の第4校舎の裏を、全身の打撲を擦りながら歩いていった。

さっきまた放送があった。

その放送によると、現在の生存者は既に50人を切っているらしい。

「だいぶ、減ったなあ」

ここまで減ると、あと残っているのは相当な手練れか、自分の力量をわきまえて敵を選んでいいるヤツか……

「後は、何かの目的の為に意図的に闘いを避けてるヤツだな。・・・」
「・・・」居るんだろ？ 出て来いよ」

俺は足を止め、校舎の隅、小さな林と化した藪の中にいる二つの気配に向かってごく自然に呼び掛けた。

そして、その返事は意外なほどあっさりと帰って来た。

「やっぱり、分かっちゃいましたか。さすが、萩原さん」

そう言って、藪の中から出てきたのは、目に戦意を宿していない、二人組のごくごく普通な女子生徒だった。

見覚えは……無いと思う。

と言うより、俺は他人のことを覚えるのは大の苦手だし、1000を優に超す桜花学園の生徒全員を覚えるのなんて不可能だ。

「あ、あの……」

そんな悩んでいる俺に、女の子たちの内の一人、髪をショートカットに切り揃えた小柄で大人しそうな女子の方が、オドオドしながら話しかけてきた。

「わ、私。あなたと同じ3年D組だった皆本愛架みなもと・あいです。覚えてますよね」

……

って、同じクラスかいっ！

俺の胸の中が、ものすごく申し訳ない気持ちでいっぱいになった。そんな心の内が顔に出ていたのか、皆本の後ろに控えていた切れ目で勝ち気そうな女子が、今にも噛み付かんばかりに俺を睨みつけつつ、愛架の肩をポンと叩いた。

「ほら、愛架。アタシの言った通りでしょ。コイツ、同じクラスのアタシたちのこと、まったく覚えてなかったわよ」

「あ、ああ……。……申し訳ない」

その抗議に対しては、ただただ頭を下げるしかなかった。

そんな頭を下げる俺の耳に、皆本の自己紹介が流れてきた。

「ランクはC。好きな科目は現文で、嫌いなのは数学です」

「ちよつと愛架、聞いてる？」

「好きなものはぬいぐるみと少女マンガで、嫌いなものは虫です。

ああそれから、特技はお料理で、ええつと、後は……」

「はあ、ダメだこりゃ」

一向に自己紹介を止めようとしないうちに皆本に溜息を洩らした切れ目の女子は、いきなり俺の方を向いたかと思うと、ビシッと俺を指差して有無を言わさない口調で俺に言葉を叩きつけてきた。

「おい、萩原一騎っ」

「な、なんだ？」

「今から愛架がアンタに大事な話をするから、ちゃんと聞いてよ。それから、愛架は落ち着いて」

「え、あ、美喜ちゃん」

「たくつ、ようやく気づいたか？」

マシンガンの如く自己紹介をする皆本を落ち着かせ、切れ目の女子は「行ってこい」と、皆本の小さな体を俺目掛けて突き飛ばした。「つきゃ」

小さな悲鳴を洩らし、俺の本当に目の前に倒れ込んできた皆本は、一瞬背後で手を振る切れ目の女子と目を合わせると、顔を真っ赤にして、震える声で思いつきり、

「大好きです、萩原さん。付き合ってください」
と叫んだ。

桜が舞い散る中の告白。

俺は怯えるように震える皆本を前に、あらかじめ用意しておいた返答を吐き出した。

「悪いな」

皆本の緊張した告白に対し、俺の返答はごくごくあっさりしたものだっただ。

「つえ、何で」

どこか焦るように問いただしてくる皆本に、俺はどう説明したのかと、頭を掻いた。

「萩原さんは、私のこと嫌いなんですか？」

「いや、嫌いとかじゃなくて」

「じゃあ、イイじゃないですか！！」

今にも泣きそうになりながら懇願してくる皆本に、俺は頭を悩ませる。

「もしかして、彼女とかいるんですか」

「いや、いねえーけど」

「それならっ」

「アゝ、もう。そうじゃなくてだな」

さっきよりも強引に、俺は頭を掻きむしる。

こつというのが、一番苦手なんだよな……

単なる喧嘩や、北馬みたいに実力行使とかなら分かりやすいんだけど。

「あゝ、んゝと。俺、恋愛に関しては無頓着だから」

「そんなの、私は構いません」

「いや、構う構わないじゃなくて……」

「……何で、私じゃダメなんですか？」

「いや、だから皆本がダメとかじゃなくて」

堂々巡りだった。

「告白してくれるのは嬉しいけど、俺は色恋沙汰が苦手なんだよ」
「大丈夫です。恋愛のマニュアル本なら10冊以上読破していますから」

「だから〜」

どう説明すりゃいいんだよ？

こうなるのが嫌だから、きつぱりと断りたかったんだけどな。

そんなやりとりが両手の指で数えられなくなったところ、漸く皆本は頷いた。

「告白を受け取って貰えないことは、分かり……ました」

「そうか、悪いな」

説得開始から約10分。

なんとか円満解決したことに、俺はホッと胸を撫で下ろした。

でも……

「じゃあ」

「ん？」

その考えは甘かった。

「実力行使で、何がなんでも認めて貰います」

「っえ？」

その言葉と同時に、鋭利な何かが俺の左腕と右足を切り裂いた。

俺の体に傷を刻み付けたソレはそのまま空中を旋回し、立ち並ぶ桜木の枝を数本切り落として、再び皆本の手には舞い戻る。

薄い銅鉄板製の輪で、外側に鋭利な刃を備え付けたソレは、古代インドから伝わる投擲具、『チャクラム』だ。

「チッ！」

舌打ちを鳴らし、血の緒を引きながら俺は皆本から飛び退き、警戒するのに足りる十分な距離を取る。

でも、相手は皆本一人じゃなかった。

俺の背中に突然激痛が迸る。

背中の皮が引き千切られ、制服の下から鮮血が飛び散った。

それは、途中から傍観に徹していた、美喜と呼ばれた女子が操る、

長い鞭による攻撃だった。

「美喜ちゃん！」

「愛架、約束忘れないでよ」

「うん、わかつてる。萩原さんは私と美喜ちゃんて半分こね」

「よしっ！」

「よしっ！　じゃ、ねえよ」

俺の抗議に、二人の女子は妖しく笑った。

「結局、こうなるんだよね…」

まあ、分かりやすくていいんだけど。

俺は悲しいのやら嬉しいのやら分からない溜め息を溢しつつ、ゆつくりと鞘から《神楽》を引き抜……

P i i i i i i !

「ええ！？」

突然、辺りにけたたましい警笛が辺りに鳴り響いた。

「な、何だ？」

「はい、そのバトル。少し待ってもらおうよ」

笛を鳴らし現れたのは、眼鏡を掛けた凛々しい感じの女教師だった。

「先生。どうしたんすか？」

「萩原一騎。貴方は今回のバトルに限り《神楽》を没収させて貰うわ」

「えっ！！　何で？」

俺が驚きながら訊ねると、先生は大きく張った胸のポケットから、一枚のカードを取り出した。

それは、バトルをより面白く、かつ実力が公平になるように学校の何処かに隠された、EランクからBランクまでの生徒だけがA、S、SSランクの生徒に対して使うことができる特別ルールカード。でも、このカードはそう簡単に見つからないように、先生たちが学園のいたるところに様々な技術を使って隠していたはずだ。

「良く見つけたな〜」

「貴方の為に頑張りました」

手をぐつと握り自分のことをアピールする皆本。

俺は改めて、この学園の女子を敵に回すことの恐ろしさを思い知った。

「は~~~~。それで、先生。今回はどんな特別ルールなんですか？」

「今回、皆本愛架・大畑美喜おおばたけの両名は『武装解除』のカードを提出したわ。いいわね、萩原君」

「俺に拒否権て有りましたっけ？」

「もちろん、無いわ」

きつぱりとむしろ気持ちいいくらいスッキリとした即答だった。

まあ、なんにしるルールじゃ仕方ない。

俺は腰から鞘を抜き、《神楽》を収めて先生に渡した。

「他に武器は持って無いようね。いいわ、三人とも思う存分やりなさい」

「存分につて、俺は武器取り上げられてんですけど？」

「「男が細かいことを気にしない！」」「」

皆本・大畑・先生。

見事なハモリだった。

「理不尽だ」

ため息交じりに肩を落とし、俺は世の中の不条理に小さく嘆く。

「まあ。それでも、なんとかなるかあ」

首をコキコキと鳴らし、俺は《神楽》をすんなり諦めて、気を取り直して皆本と大畑に向き直った。

「確認しておくぞ。この勝負、俺が負ければお前らの彼氏でも奴隷でも、何にだってなってる。反対に俺が勝てば、潔く俺のことは諦める。いいか？」

念のため確認する俺の問いに、皆本は頬を紅潮させ、大畑は猛獣使いのように鞭をしながら頷いた。

俺との戦いに身構える二人の女子の意気は、俺に悪寒を走らせる

のに十分だった。

「萩原さん。絶対に私に惚れさせて見せますから」

「『黑夜叉』と呼ばれた侍も、剣が無ければただの人。苦痛の快楽をアンタに教えて、ア・ゲ・ル」

「御免被りたいところだけだな……」

なんとも背筋が底冷えする返答と共に、あまり俺の望まない闘いが始まった。

「行きます、萩原さん。いえ、一騎」

「呼び捨てかい!？」

ほどよいボケは置いとして。

皆本は新たに二枚のチャクラムを取り出し、計四枚になったチャクラムを俺に向けてかまえる。

「やつ!」

軽い掛け声とともに、皆本がチャクラムを投げつけた。

その数は二枚。

残りはまだ皆本の手の中だ。

軽く身を捌き先に飛んできた二枚を避けた俺の目の、前にチャクラムを振りかぶる皆本の顔がアップで映る。

「接近戦もでいいのか？」

「はい。あなたの隣に立つために」

「あ……そう」

目を見張る俺に、かなり様になった動きで皆本がチャクラムを振りかざす。俺の制服を縦に裂くチャクラム。

「さすがに、素手で受け止めるのは痛そうだな」

眩きを残し、俺は背後から飛来したチャクラムを身を屈めて避けつつ、後方へと大きく飛びのいた。

「つう!!」

突然左腕に走る激痛に俺は息を飲む。
バチつと空中で音速越えの音が鳴る。

俺の左腕を血みどろに染めた鞭が、再び主である大畑の手の中に収まった。

「私を忘れるなんて、あんまりだぞ。一騎」

満面の笑みで俺を責める大畑。

そして、大畑の鞭が振るわれた。

鞭の先端が再び音速を超え、俺の体に伸びる。

「チッ！」

小さく舌を打ち、俺は横手に飛び大畑の鞭を避けた。再び飛来するチャクラムの刃。

「またかよっ」

苛立ちを吐きだしながら、俺は腕を振り上げ、飛来する二枚のチャクラムの腹を殴りつけた。回転が不規則になり浮遊力を失ったチャクラムが空しい音と共に地面に落ちる。

それを眼の端で確認しながら、俺は鞭を握り直す大畑へと飛び出した。

が…

「んげえ！」

風を切り裂き、唸りながら迫る刃。

しかも今度のチャクラムは大きさが先ほどまでの5倍はあるぞ。まともに食らえば、俺の体も真つ二つになりそうだ。

―萩原さんは私と美喜ちゃんで半分こね―

まさか、本気じゃないだろうな？

俺の背中に嫌な汗が流れる。

「しかし、よく投げたな」

半ば感心しながら、俺は鞭を構える大畑を警戒しながら身構えた。飛来する4つの刃。

そのうち二つが俺の目前で急速にその進路を上空へ変えた。

俺は残りの二枚を横手に飛び避けながら、バラバラに飛ぶ4枚のチャクラムの位置を気配と音を頼りに把握する。

そのとき、

上空から断続的に何かが切り落とされる音が響いた。

それは、チャクラムによって桜木の枝が次々と断ち切られる音だ。切り落とされた桜の太い枝が、重力の手に捕らえられ、太陽の光を覆い隠しながら俺目掛けて降り注ぐ。

「おいおいおいおいおい」

殺す気かつ！？

確実に仕留める気で繰り出される攻撃に、俺は前後左右から襲うチャクラムと、こちらの隙を突きの確に急所を狙ってくる鞭の猛攻を避けながら、降り注ぐ枝の隙間を見極め、安全地帯へ体を滑り込ませた。

だが、桜の枝を切り落とした意図は、もつと別のところにあった。

上から舞い散る桜弁と下から舞い上がる桜弁に、俺の視界が鮮やかなピンク色に埋め尽くされる。

「どわっ！！」

散り乱れる桜弁を切り裂き、突然チャクラムが出現。寸前で身を屈める俺の髪の毛の末端が、その刃に刈り取られる。

次の攻撃は背後。

俺は無様に地面を転がりその一撃を避けた。

「っ！」

俺の肩胛骨辺りの皮を剥ぎ取ったチャクラムは、再び桜弁の中に消え、新たな二枚の見えないチャクラムが左右の桜弁の中から俺を狙う。

でも、もう見えない攻撃は慣れた。

今度の攻撃を、俺は余裕をもって避ける。

しかし、それは慢心だった。

「……ッチ。油断したか」

一陣の風と共に、桜吹雪が晴れる。

「フフフフ。捕まえた」

俺の左手首は、大畑が操るヘビのように動く鞭に捕らえられた。

俺の腕に巻きつく鞭を絞り上げながら、大畑は俺に向けて欲情したように顔を赤らめながら口を開く。

「萩原。アンタは丈夫だから、大抵のことには堪えられるよな」

「ああ。一騎。これでようやく貴方は私の物に」

別々の意味で恍惚とした笑みを浮かべる女猫皆本と女豹大畑。かなり恐い光景だった。

しかし、そこはやはり桜花学園の生徒か。

愉悦に浸って、俺を取り逃がすようなことはない。

ギリギリと骨を砕かんばかりに絞まる鞭に俺は多少顔をしかめながら、皆本と大畑を睨み付けた。

「なぐに、その目は？」

だが、勝利を確信した大畑は俺の眼光を余裕で受け止め、懐からもう一本鞭を取りだし、皆本と頷き合った。

「萩原一騎」

「その心と体。私たちが貰います」

叫ぶ二人の興奮に呼応するかのように、二本目の鞭が唸り、4枚のチャクラムが俺目掛けて飛翔する。

でも……

「甘いな」

静かな呟きを残し、俺の両腕がその双撃を迎え討った。

俺の左手が大畑の攻撃に合わせて、踊る。

手首を返し絡み付く鞭を握り、力ずくで大畑から奪う。さらにその鞭を操って迫りくる二本目の鞭を空中で絡めとり、同じく力ずくでその鞭も奪い取る。

俺の右腕が皆本の攻撃と共に、加速する。

風を切り裂くチャクラム。

その軌道は、もう見切った。

最初の二枚のチャクラムを、俺は指と指の間で掴み取り、さらにその刃を利用して残りの二枚を叩き落とした。

「う、嘘」

「そんな、ことって」

大畑と皆本が驚きに眼を見開き、愕然とする。

今や彼女たちの武器は、完全に俺が支配していた。

「お前らの武器、返すぞ」

「ええ！」

「キャッ！」

そして、俺はこの戦闘で初めて攻撃に転じた。

大畑が操る鞭がへびなら、俺の操る鞭は竜だ。

俺の手首の動きに合わせ、意のままに空中を駆ける鞭は、大畑の細い胴に絡み付き、その身体を捕縛する。

そして、鞭を操ると同時に皆本に投げつけたチャクラムは、寸分違わず皆本の制服に食らいつき、一切肌を傷つけず制服だけを細切れに切り裂いた。

「キャーッ！」

肌を腕で隠し、その場に蹲る皆本。

「このっ、ほどけえー」

そして胴に巻き付いた鞭から、懸命に逃れようとする大畑。

誰から見ても、勝敗は明らかだった。

「こら、萩原。素手の相手に武器を使ってくるなんて、テメエは人でなしかな？」

「そうです、そうです」

「あのなあ。お前らがそれを言うな！ お前らが」

身勝手な言い分に俺が脱力していると、それまで闘いを見守っていた先生が俺たちのもとへ歩み寄って来た。

「リングは割れていませんが、皆本・大畑は戦闘不能と判断します。よって、この勝負。勝者、萩原一騎」

「どーも」

なんともアホらしい闘いだったが、取り敢えず無事に済んだことに、俺はスツと肩を撫で下ろす。

しかし、そんな勝利の余韻は、長くは続かなかった。

「っ!!」

一帯の空気が、凍る。

そして、背中に直接銃口を押し付けられるような、強烈なプレッシャーが俺の身体を支配した。

額に冷や汗が流れるのを感じながら、ゆっくりと振り向く。

そこには嵐のような殺気を纏った、一人の男子が立っていた。

第5章 頂に最も近い者

全身の毛が逆立ち、俺は無意識のうちに右手を左腰に伸ばす。
しかし、伸ばした手は虚しく空を掴んだ。

今の俺は《神楽》を先生に預けた事さえ忘れるほど、その男子が放つ氣に全身全霊を費やしていた。

「先生、《神楽》を」

「ええ、わかつているわ。——はい」

「ども」

先生から受け取った《神楽》を、俺はすぐさま腰に差す。

「それから……」

そして俺が口を開いた、

まさにその時。

俺の背後で、ドスツと何かが地面に倒れる音が断続的に響いた。
それは、幾千の針のような殺氣に当てられた皆本と大畑が、氣を失って地面に倒れた音だった。

「さすがに、彼の殺氣をともに受け止めるのはこの二人には無理みたいね。萩原君、二人は私が連れていくから、——思う存分やりなさい」

「お願いします」

俺がそう言つて軽く頭を下げると、先生は小さく微笑んで、先生自身かなり細いにも関わらず軽々と二人を担ぎ上げ、何事もないように退散していった。

さすがは女性といっても、この桜花学園の教師だ。

「さてと……」

一息ついたところで、俺は改めて男子生徒と向き直る。
するとソイツは少し子供じみた、でも全く油断ならない微笑みを浮かべて、俺に手を振ってきた。

「SSともあるうものが、Cランクに手酷くやられたな。一騎」

その男子が口を開くと、それまで辺り一帯に吹いていた春風がまるで自由を奪われたかのようにピタリと止んだ。

見た目の体格は普通の男子と変わらないが、その制服の下に限界を超えた鍛練によって造りたげ肉体を隠す、髪を見苦しくなくらいに伸ばした端正な顔のSランク最強の男子が、爛々と輝く鷹のように鋭い双眸を俺に定めた。

「こっちもいろいろと訳ありなんだよ。んで、お前は何の用だ？」

Sランクに最も近く、一切の武器を使わない《拳闘師》。なきの 風野アキラ

俺の問いに、アキラはクスクスと笑って、答えた。

「俺は、最強を取りに来た」

その一言に、俺の背筋がゾワツとした。

奢りも、慢心も、一切ない。

何も臆することも、気負うこともない。

それは、世間話でもするように自然で、

けれど、絶対に覆すことのできない言葉だった。

「……なるほど。俺を倒してSランクになるつもりか？」

確信を持って俺はアキラに向けて口を開く。

だが、

「違うよ」

アキラは小さく笑って、首を横に振った。

「俺が欲しいのは、この桜花学園における『最強』だ。まずは“J”

”の名を持つお前を。そして残りの二人を倒して、俺が最強になる」

「俺だけじゃなくて、あの二人まで相手にする気か？」

「無理だと思うか？」

「……いや、メツチャクチャ面白そうだ。やっぱり、ケンカの原因はシンプルじゃねえとな」

俺は興奮につり上がる頬を抑えきれないまま、スラリと《神楽》を鞘から抜き放った。

そして、《神楽》の鋭く光る刀身に答えるように、アキラがゆっ

くりと拳を作る。

「……………」

「……………」

俺とアキラ。

二人から溢れ出す殺気と闘気の応酬に、草木がざわめき、生き物が逃げ出した。

未だお互いに一手を繰り出していない状況ですら、自然が脅威を感じるのには十分すぎるようだ。

既に言葉はない。

そしてこれからの闘いに、俺は一切手加減をしない。

学園の死者をも生き返らせる保健医の先生を信じて、俺は殺す気でアキラと死合に応じる。

渦巻く死陣の中、沸き上がる興奮に不自然に笑う両者。

1分……………」

5分……………」

10分……………」

バサバサバサッ

まるで、動かない両者に耐えきれなくなったかのように、突然激しい突風が吹き荒れ、

俺とアキラは、弾かれたように動き出した。

目測で30メートルは有った俺とアキラの間合いが消える。

アキラが間合いに入った瞬間、俺は地面を這うように両手で握る《神楽》をアキラの胴目掛けてすくい上げる。だが、アキラは余裕を持ってその斬撃を避け、相対して繰り出される拳が俺の顔面に繰り出した。

疾い！！

俺はすぐさま振り抜いた《神楽》をアキラの腕目掛け引き戻した。
「ドウあ」

突然、俺の視界が地平から垂直に反転する。

いつの間にか体勢を崩された俺は、鳩尾みぞおちをアキラの強力な右ストリートに撃ち抜かれた。

その勢いのまま俺は地面に叩きつけられ、腹部と背中の中痛打により呻き声と共に肺から空気が押し出される。

だが、それらが俺の口から吐き出される前に、アキラは俺の頭を鷲掴みにした。

ヤバイ。

俺の中の危機察知センサーが、アキラの意図を感じ取り、本日最大の警告を発する。

遮られる視界の中、俺は目の前の暗闇に向けて、力の限り右手一本で握る《神楽》を振るった。

「つつ！」

浅い手応えと共に、顔面の圧迫感が消える。

俺はすぐさま体のバネを使って跳ね起き、左二の腕辺りから血を流すアキラへ向けて疾走した。

向かってくる俺に応戦して、アキラが俺の側頭部目掛けて足先が視認できない速度の上段蹴りを放つ。凄まじい風圧と共に繰り出されたその蹴りを寸前で身を屈めて避けた俺は、銀の軌跡を空中に描き、《神楽》の刃がアキラの首に滑り込ませる。しかし、アキラはギリギリでその刃を避けたかと思うと、左手を砕く拳ではなく、貫く抜き手に変え、再び俺の顔面に必殺の一撃を繰り出してきやがった。

首を傾げるが間に合わず、頬の薄皮が数枚、アキラの指先に剥ぎ取られる。

しかし

アキラのその一撃は、単なる囮に過ぎなかった。

「！！！」

俺は見えていない。

だが、俺の本能がアキラの殺気を感じ取った。
本能が理性を置き去りにして、俺の身体をアキラから大きく飛び退かせる。

俺の背中に、冷たい汗が流れた。

ゆっくりと俺はアキラを警戒しながら、自らの視線を下げる

「っげ！」

俺の胸元、厳密に言えば心臓部分の制服が根こそぎアキラに奪われていた。

「ふい〜。あ〜ぶねえ〜、あぶねえ〜。そういえば、二人で飛驒の奥山に鬼退治に行ったときも、お前この技を使ってたよな。鬼の心臓を素手で抉り出す奴なんて、俺は初めて見たぞ」

「そう言う一騎だつて……」

まだ痛みの取れない腹部を擦りながら俺がそう言うと、アキラは自分の首筋に刻まれた朱い筋を撫ぜながら言い返してきた。

「金棒ごと鬼の胴を真つ二つにしてただろ。それもボスクラス三体同時に」

「あれ、そうだったのか？」

「そうさ」

お互いに一歩間違えれば致命傷を相手に与えられながら、俺たちは笑っていた。

交差する視線。

大気を応酬する殺気

一瞬でも気を抜けない緊張感。

拳が肉を打ち、刀が肉を切る感触。

踏み込む力に耐えきれず弾ける大地。

全て忘れ、ただ生きる為だけの本能のみが体を支配する。

「へへへへへ」

「フフフフ」

不敵。

それ以外の言葉が見つからない笑いを発しながら、俺たちは互いに限界まで筋肉を緊張させる。

そして幾ばくかの静寂を切り裂き、俺たちは再び動き始めた。

俺は《神楽》を水平に構えアキラ目掛けて疾走。だが、アキラの動きはそれまでとは全くの別物だった。

アキラはまるで水に流れる花弁の如く流麗な動きで滑るように《神楽》を受け流し、極端に狭い間合いから俺の胸元に手を乗せた。

腕を振りかぶるような動作はない。

だが、アキラが攻撃に転じた瞬間、軽く乗せた掌から凄まじい衝撃が体を駆け巡り、俺の口孔から血塊を吐き出させた。

「ゴフツ。……浸透……勁……か」

《浸透勁》

それは中国拳法における気の流れの一つだ。

初めに俺の体勢を崩した柔術といい、今の中国拳法といい。

さすがはSSに最も近い男。

『マスターズ・ペア（素手の支配者）』の異名は伊達じゃない。

だが、いつまでも後手に廻る気はないぞ。

「そうこなくっちゃ」

口に残る血の残滓を唾と一緒に吐き捨て、俺は神速の太刀を持ってアキラに斬り込んだ。

真上から《神楽》を振り下ろし、バックステップでその一撃を避けるアキラを追い、交わされた《神楽を》を下方から捌き上げる。

今度は右に体を捌くアキラに合わせて《神楽》の刀身を寝かせ、振り切る。バク転で再度《神楽》の刀を避けるアキラ。そのアキラへ執拗に《神楽》が食らいつく。

息つく隙もない斬撃。

ついに《神楽》の刃がアキラに追いついた。

しかし、攻撃を易々と迎え入れるほど、アキラはお人好しじゃない。

アキラは真つ向から刃先と対峙するのではなく、撫でるように《神楽》の腹に手を当てその軌道をずらすか、叩き落とすことで俺の攻撃に対応する。

だが、次の瞬間。

《神楽》の刀身を上方に受け流したアキラに、零コンマ数秒の隙が出来た。

それは図でも何でもない。

アキラは寸前で何とか衝撃を逃がす方向に跳んではいたが、俺の跳ね上がる左足の爪先は深々とアキラの右脇腹に突き刺さり、その体を数目掛けて吹き飛ばした。

バキバキと凄いい音を立て、アキラの体が藪の中に埋没する。

「チャンス」

千載一遇の勝機を逃すまいと、俺はすかさず横手から《神楽》を振り切り、生い茂る藪を薙ぎ払った。

「なっ!？」

零れる驚愕

アキラが、いない!？

「どこだ？」

思わず洩れた問いに対する答えは、齒の生い茂る上空から俺の頭部目掛けて降ってきた膝が物語っていた。

「もらったーっ」

上空から俺の耳を打つ、アキラの快心の叫び、

「っ!」

ギリギリで無様に転げる俺の肩を、アキラの膝が掠める。

あつぶねえ~~~~~

今のは本当にヤバかった。

俺の背筋に大量の冷や汗が流れ落ちる。

「って、おいっ」

凄まじい音と共に、寸前で避けた俺が今までいた地面が突き刺さる膝の衝撃に、まるで隕石が落ちたかのように大きく抉れた。

その隕石モドキ、もといアキラは、再び鋭い攻撃に主体を代え、躊躇うことなく俺の間合いに飛び込んできた。

拳の弾幕が俺に襲いかかる。

迎え撃つ《神楽》の煌めき。

だが、受けきれなえ！

「つぐ」

左肩に、右肋あはじ

いいのを、二発喰らっちゃった。

拳幕の縫い目を縫って救い上がる《神楽》。

飛び退くアキラ。

そして、再び拳の弾幕が俺に向けて放たれた。

「させるかつ」

アキラにしてはらしくない短絡的な攻撃だったが、そのまま受け入れるわけにもいかず、俺は慟哭と共に横手からアキラの胸に銀の軌跡を残す《神楽》を走らせる。

「つな！」

突如としてアキラの顔が、俺の視界から消えた。

いや、消えたわけじゃない。

アキラがその場にしゃがみ込んだだけだ。

俺目掛けて飛び込んできたアキラが、寸前で急ブレーキ&急屈伸。膝を折り曲げ急にしゃがんだアキラの髪だけを薙り取り、《神楽》の刃が右から左へと流れる。

結果、見事に俺の一撃を避けたアキラは、膝を曲げた状態から全身のバネを使って跳ね上がり、天上を貫く抜き手を俺の顎に繰り出した。

大気を切り裂き、俺の顎を穿かんと繰り出されるアキラの鍛え抜かれた指先。

俺はあえて力を入れず、横に流れる《神楽》の遠心力に身を任せ、アキラの一撃をやり過ごし、

「ここだーーーーっ」

跳び上がるアキラ目掛けて、俺はその場で旋回し、一瞬の間も置かず、再度横手から《神楽》を振り抜いた。

……が、

「っげ？」

俺の振るった《神楽》が、その刀身がスピードに乗る前に、横にあつた太い桜の幹に食らいつてしまった。

「こんな時につ」

苛立ちを吐き捨て、幹から《神楽》を引き抜く。

同時に本能が俺を横に跳び退かせた。

転げざまに俺の眼が背後の光景を捉える。

「おいしい」

悔しそうに呟くアキラの声。

俺の背後では、太い桜の幹がアキラの手刀に貫かれていた。

鈍い音と共に、桜の気が藪の中で鈍い音を立てて倒れる。

「おいしい、環境破壊だぞ」

「気にしない、気にしない」

「いや、気にしろよ」

笑顔でとぼけるアキラにツッコミを入れつつ、俺は即座に自分の置かれている状況を整理した。

藪の中じゃ長い武器を持つ俺が不利。

地の利はアキラにある。

「逃げるかつ」

瞬時に今の状態を割り切った俺は、無理をしてアキラに追撃を加えず、その姿を視界に収めながら、薄暗い藪の中から白日の下へと飛び出した。

その一瞬、さんさんと降り注ぐ日光に俺の視覚が奪われる。

しかし、それは俺に限ったことじゃない。

「逃がすかつ！」

俺を追い、続けて藪から飛び出すアキラ。

暗中から光中に飛び出したことにより、一瞬、本当に一瞬だけ先

ほどの俺のようにアキラの目が眩んだ。

「もらったーっ！」

タイミング・速度・角度・地の利、全てが完璧に重なった瞬間に、俺は唐竹割りの斬撃をアキラの正中線目掛けて振り下ろした。

勝った！

そう、思ってしまった……

アキラの全速はこんなもんじゃなかった。

アキラの足下が破裂する。

同時に、アキラが自身の影をも置き去りにしかねない速度に加速した。

しかし、正中線を取っている分、俺に分があるはず。

「っな！」

その考えは……甘かった。

突然、真っ正面から真っ直ぐに来ていたアキラの体が、地面の破裂と共に上空の方へと跳ね上がる。

やられた

俺は心の中で、俺自身の甘さを罵った。

絞りを効かせて、何とか《神楽》が地面に突き刺さるのは阻止したが、俺の後ろが完全にアキラに取られる。

気配のみで背後の状況を探ると、飛び上がったアキラはそのまま校舎の壁に到達し、全身のバネで衝撃を受け止めていた。

そして受け止めた衝撃を解放。

俺が振り返りその目の端にアキラを捉えたとき、既に伸ばされた指先は俺の眼球数十センチ手前まで迫っていた。

逃れられない危機。

避けられない死地。

打開する方法は1つしかない。

俺はすぐさま脳の運動野に存在する、肉体の限界を司る部分の制御装置ミッダーの枷を外した。

その途端、一瞬前までは死地だった状況が何でもない状況に変わる。

俺は余裕を持ってアキラの一撃を避け、《神楽》で横一文字に胸を裂き、脇腹・鳩尾にそれぞれ五発の拳を叩き込み、オマケとばかりに地面へと蹴り付けた。

最後に肉体が崩壊しないよう、制御装置を元に戻す。

その間、僅か0・0125秒。

でも、さすがアキラ。

俺の攻撃が致命傷にならないように、全て軸を微妙にずらして受けやがった。

「つく」

アキラは苦悶を洩らしつつ、右腕一本で地面に着地。

そしてすぐさま、その右腕を軸にし、一瞬で体の前後を入れ替える。

奥歯を噛み締めながら顔を上げるアキラ。

その双眸には、後を追ひ、《神楽》を振り抜こうと限界を超えて筋肉を緊張させる俺が映っていた。

「っ！ー！！」

アキラはギョツと目を見張り、着地時の余剰エネルギーをそのまま利用し背面から後ろへ飛び退く。

だが、それだけなら《神楽》の刀身は確実にアキラの胸を切り裂いていたはずだ。

アキラとの間合いを詰める俺の顔面を、飛び退くアキラの右手から撒かれた砂の粒子が覆った。

同時にアキラは後退を止め、前進。

鋭い抜き手が俺の腹部に襲いかかる。

だが、俺だって負けじゃない。

俺は緊張させていた筋肉を解放。

白日の光を切り裂く銀光の軌跡が、アキラの首筋に走った。

それまで神速の領域同士の攻防が幻であったかのように、俺とアキラの動きがピタリと止まる。

「ふっ」

アキラの抜き手は俺の腹、1ナノメートル手前で止まっていた。
「へっ」

《神楽》の白刃は、アキラの首筋の皮を1ナノメートル斬り込んで止まっていた。

「俺の…負けだな」

剣と拳を納める両雄。

敗北の呟きは、アキラの口から零れ落ちた。

「まったくもって、ギリギリの勝負だったな。おゝ、痛てえゝゝ」
取り敢えず戦闘で強張った筋肉と緊張を解しながら俺が口を開くと、アキラはスッキリした中にも、ちょっとした苛立ちを含め、言った。

「何がギリギリだよ。一回の勝負で俺は二回もお前に負けたんだぞん？」

2回負けた……？

「おいおい、アキラ。あんまり自分を卑下するなよ。お前が負けたのは、最後の一回だけだろ。むしろ、途中までは俺の方が押されてたぞ」

意味の分からないことを言うアキラに俺が疑問を口にする、アキラは

「まあ、負けたんだから、答えるか」

と呟きながら答えてくれた。

「一騎。お前、三年生の初めに年間目標を決めたこと、覚えているか？」

「あ、ああ。そっぴややつたな、そんなこと」

「一騎は、何て書いた？」

「『早寝 早起 朝ごはん』」

「……俺は冗談が通じない方だぞ」

「いや、マジなんだけど」

俺が真顔で答えると、アキラは疲れたように、そしてどこか諦め

たように溜め息を洩らしやがった。

失礼なやつだ。

「何だよ。じゃあ、アキラは何て書いたんだ？」

「俺は……『一切の武器を使わない』って書いた。だから俺は修学旅行の時の枕投げだって、枕を使わずにやってたんだぞ」

ああ、そういえばそんなこともあったな。

「んん、まあ、あれがまくら投げって言えんのか、微妙なところだな。もう少しで宿を全壊するところだったし。——それで、その目標が今の鬭いと、どう関係するんだ？ 今だって、アキラはずっと素手で……」

そこまで言ったとき、突然俺の口の中からジャリっという音がした。

まさか…

「最後の目眩ましか!？」

俺がそう叫ぶと、アキラは自嘲気味に笑って

「そうだ」

と呟いた。

「ちょ、ちよつと待てよ、アキラ。使ったって言っても、こんな砂、武器でも何でもないだろう」

俺がそう叫ぶと、アキラはため息をつきながら小さく肩を竦めた。

「いや、武器でなくても、道具を使ったことにはかわりない。——でも一騎、勘違いするなよ。最後の一撃。あれは本当に、俺の全力だった」

そこで一旦言葉を区切ると、アキラはもう一度右手で固く拳を作り、俺の胸をトンと軽く叩いた。

「だから悔いはない。最高のケンカだった。ありがとよ、一騎」

今度は自嘲ではなく、心の底からの笑みに、俺もアキラの真似をして拳を作ってその胸をドンと叩いた。

「また、やろうな」

「ああ。今度こそ、お前に勝ってやるよ」

その言葉を最後に、アキラは颯爽と身を翻した。
ひるがえ

第6章 ラストバトル

アキラと分かれ再び独りになった俺は、自分の状況を確認し始めた。

体中裂傷・打撲のパラダイスだが、戦闘に影響を与えるような傷はない。

そんなとき、ポケットに入れていた携帯が突然鳴り出した。

「はい、もしも……」

取り敢えず電話に出ると、太く威圧感のある男の笑い声が、俺の鼓膜を破かんばかりに聞こえてきた。

『ハッハッハッハ。聞こえているか？ 俺様だ、俺さ……。ッピ。ツーツーツー』

とりあえず五月蠅かったから切つとい……。

ピピピピピピピピ… ツーツーツー……

「みゃ……」

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

「みよ……」

ツーツーツ…ピピピピピピピピピピピピ

切つても再び鳴り響く着信音。

あ~~~~、もう。

「何なんだよ？」

俺は仕方なく会話ボタンを押し、嫌々ながらも受話器を耳にあてがった。

「ったく。誰だ、一体？」

『俺様だつて、言ってるんだろ。何切つてやがんだ』

「オレオレ詐欺なら間に合ってるぞ」

『何、寝惚けたこと言ってるやがんだ。馬鹿がつ』

耳を突く大声に、俺は顔をしかめながら、思わず携帯電話を耳から離す。

そして、大きな溜め息を一発吐き出してから、再び携帯を耳に当てた。

「五月蠅えなあ。——それで、狂夜^{きょうや}。何のようだ、一体？」

「んん。ああ、そうだ、忘れるとこだった。おい、一騎。てめえ、残りの人数が何人か知ってるか？」

「残り？ ……ああ、生存者か。そうだな…、俺が最後に聞いた時は50人て言ってたからなあ。残り…3、いや20人てところか？」
俺がそう答えると、携帯の向こう側で狂夜がばか笑いしている声が聞こえてきた。

「バーカ、ハズレだ」

馬鹿はお前だろ。

心の中で呟きながら、俺は狂夜の言葉を待った。

「———今、この学園内でリングをはめていんのは、俺と、てめえと、アイツの三人だけだ」

「3人！？ おいおい、えらく減ったな」

俺は同級生の行動力に今更ながら改めて感心した

「…それで、用件は何だ？ まさか、俺と組んで二人でアイツを叩く気じゃないだろうな？」

俺が訊ねると、またまた大きな笑い声が響いてきた。

「本当に馬鹿だな、お前は。せっかく学園公認で、てめえらとやれるってーのに。そんな勿体ないこと、するわきゃねえーだろ」

「じゃあ、何なんだ？」

一向に先の見えない話しに俺が苛立ち紛れに呟くと、狂夜がいつになく真剣な声で訊いてきた。

「一騎、お前は俺やアイツにタイマンで勝つ自信はあるか」

「俺が、狂夜やアイツに？」

どう、だろうか…？

負ける気はない

けど……

「確実に、って保証はないな」

「そうだろ。俺様もだ。だからこそその提案なんだが、どうだ、いつそのこと最後は3人でやらないか？ どうせやり合うなら、少しでも全快の方がいいだろう。アイツには話をつけてある」

「三つ巴ってわけか……」

狂夜の提案を聞いた瞬間、俺の中を稲妻のような何かが駆け巡った。

「おもしれえ。ノッた」

『よし。場所は第一校舎のグラウンドだ。直ぐ来いよ』

狂夜の電話はそれで切れ、俺の頬が歓喜につり上がった。

「言われなくても、より道なんかするわけないだろ」

すでに切れた携帯に呟きながら、俺は振り返り、昂る気持ちを抑えながらゆっくりと歩きだした

狂夜から連絡を受け数分。

俺は無駄に広い桜花学園の中を1人歩く。

通い詰めた学舎の至るところには、今日の鬪いの傷跡がついていた。

「学園に来るのも、今日で最後か……」

学園名物の千本桜の間を歩いていると、柄にもなく感傷が俺を襲った。

思い起こしてみれば、始まりからやっぱりむちゃくちゃな学園生活だった。

入学式での『入学おめでとうバトル』に始まり、新学期早々の『クラス対抗無人島サバイバル生活』。

見ず知らずの他人同士をいきなり無人島に置き去りにするなんて、今考えても、やっぱり無謀な話だ。

毎回必ず半死人が出る体育祭や、妖精と歌声を競った音楽祭。

そして、俺たちが3年の時に行われた桜花学園祭。

「ホント、祭り好きの集まりだな」

俺もその1人だけど……

「うわっ」

一陣の突風が吹き、桜弁が一齐に風の腕に拐われる。そして天高く舞い上がった桜は、ピンク色の雪となって俺の視界を鮮やかに彩った。

——ありがとう——

自然と口が開きそうになる。

でも、まだ早い

この言葉は、最後の最後に残しておこう

桜のトンネルが終わる

目の前一杯に広がるグランドの真ん中で、背中に両刃の大剣を背負ったその大柄な男、雲牙^{うんが}狂夜が、俺の姿を見つけ、幾多の傷を刻んだ、遅しく、そして大きな手を振った。

「随分とやられたな、一騎」

俺が声の聞こえる距離に近づくと、狂夜は今にも大剣を抜き放ちそうな、不敵で、それでいて自然な笑顔を、その傷跡だらけの無骨な顔に刻んだ。

「アキラ相手は、さすがにキツかった。見ろよ、この制服。心臓のところ、丸々持ってたんだぞ」

俺は狂夜がよく見えるように制服を伸ばしながら、その屈強な体の隣に並んだ。

「アキラかぁ。あいつとはおれもやってみたかったんだけどな」

残念がるように肩を竦める狂夜に俺は呆れた笑いを零しながら、残り1人の姿を探し、辺りを見渡した。

「アイツは、まだ来てないのか？」

「ああ。だが、もう来る頃だと……」

揃って辺りを見渡す、俺と狂夜。

「アラアラ。どうやら、私がビリだったみたいですね」

その澄んだ声は、俺たちの頭上からした。

上を見上げると、肩に羽衣を羽織り空に浮く箒に腰掛ける、滑らかな髪を腰元まで伸ばした、俺や狂夜と同じssランクの称号を持つ慈悲深げで柔和な顔立ちの女子。

まいはね。ゆづか
舞羽優風が微笑みながらゆっくりと降りてきた。

そして……

「キャッ」

見事に着地に失敗した。

「イタタタタ」

「たくつ。何やってんだ、つよ」

俺は溜め息混じりに呟き、優風の手を取って引つ張り上げる。

その俺の隣にいた狂夜は、箒を拾い上げ、苦笑を浮かべながら優風に手渡した。

「なんでそんな乗り心地の悪いやつ、いつまでも使ってたんだ？ お前なら、どんな魔術媒体を使ってたって同じだろ」

「ああ、それは俺も前から思ってた。何でなんだ、優風？」

俺と狂夜の共通の疑問に、優風をいつものようにほんわかと笑って、答えた。

「それは……」

「それは？」

「“魔法使い”には箒が鉄則だからに、決まってるじゃないですか。……って、あれ？どうしたの？ 一騎いー。狂夜やー」

「……」

俺たちは無言で、首を傾げる優風を睨み付けていた。

言葉にしくなくても、分かる。

きっと狂夜も思っているだろう。

そう……

訊いた俺たちがバカだった。

「……あ、にしても。この3人で色々やったよな」

俺は軽く頭を振り、今一度思い出に思いを馳せた。

「覚えてるか？ 修学旅行の枕投げで宿が半壊したとき、封印され

てた鬼神が復活した時のこと。あの時も、俺ら3人で鬼神を封印したんだっただよな」

「それを言うのなら、東京タワー爆破テロの時に、立て籠る犯人グループを全滅させたのも、俺様たちだっただろ」

「あゝ。あつたな、そんなことも。んで、その後先生たちにこっぴどく怒られてな」

「それなら私は、海外遠征で超巨大迷宮の謎解きをしたことを推薦しますわ」

「それはお前が俺様たちを無理やり連れてっただけだろ。しかも、結局は迷宮をぶち壊して脱出したからな」

「あら、そうでしたか？ 記憶にありませんが」

「「あのなゝゝゝ」」

次々と甦る記憶に話の花が咲く。

そんな俺たちの上空に、突然、巨大なスクリーンが出現した。

『さあ、桜花学園全生徒の皆さん、遂にこの時がやって参りました。参加人数1236人。そして、やっぱり最後に残ったのは、SSの冠を携えたこの3人だーっ』

上空のスクリーンにマイクを握る女子が写ったかと思うと、そのマイクを力強く握りしめ声高らかに叫び始めた。

『まず紹介するのは、このお方ーっ』

彼女の実況に合わせて画面が切り替わる。

そして切り替わった画面には、力の限りに大剣を振るい暴れ回る、狂夜の映像が写し出された。

『語り告がれる伝説は数知れず、産み出される奇跡に終わりはない。どれ程の傷を受けても倒れないそのタフネスは、むしろバカか。身の丈ほど大剣は大地を割り、20ミリの弾丸を吐き出す大口径銃は荒ぶる神魔を黙らせる。『無界の覇者』『神代の破壊神』『完全無欠最強無敵の王』、“K（キング）”雲牙狂夜あー！！』

実況と共に凄まじい歓声が、スピーカーから聞こえてきた。

「おいおい、すごい人気だな」

そう言いながら俺が狂夜の脇腹を肘で軽く小突くと、狂夜は満更でもなさそうに、小さく「ふん」と笑った。

『次に紹介するのはこの御方——っ』

叫ぶ実況と共に、再び画面が切り替わる。

今度写し出されたのは、広域殲滅魔法を発動する優風の映像だった。

『壮大にして可憐、清楚に見えて天然。森羅万象全ての主・聖霊と盟約を交わし、あらゆる魔法を使いこなす。『天界の淑女』『清廉の乙女』『聖霊王の妃』、“Q”^{クイン}、舞羽優風あ——！！』

再びスピーカーから、大音量の、特に男子の歓声が溢れだした。

「あらあら」

その声援を受け優風が頬に手を当てて微笑むと、その可憐さに男女問わないため息が零れた。

そして、いよいよ残すは俺一人だ。

『そして、最後に残すはこの男あ——』

来たっ

なんか、緊張するぞ。

俺の期待を一身に寄せ、スクリーンの映像が…、

…消えた。

「っえ？」

『すいませ〜ん。時間の都合上、ここはカットで』

っんな？

「ふっ、ふざけんなー。仮にも、この小説の主人公だぞー！！」

実況の代わりに木霊する俺の声に、爆笑の嵐が吹き荒れた。

ちなみに、俺のすぐ隣では、狂夜が腹を抱え転げ回りながら笑っている。

一生笑つてろ。このバカ野郎が。

『あはははは、冗談冗談。失礼しました。では、改めてまして……』
わざとらしく謝る司会の声と共に、スクリーンが俺の映像を写し出した。

『あらゆる武器を操るも、彼が最後に選ぶは腰に携えた愛刀《神楽》ただ一本。意外に女子から人気の高い、女泣かせの孤高の侍。しかし、その神速が繰り出す銀の軌跡は、時に時界をも切り開く。『気高き死神』『優しき阿修羅』『黑夜叉』『ジャック』、萩原一騎いー
ー！』

ようやく全員の紹介が済んだところで、俺たちは改めて向かい合った。

「あの時と、一緒だな」

「あの時、とは？」

俺のその言葉に、二人の視線が俺に集中する。

俺は小さく笑って、続けた。

「『入学おめでとうバトル』だよ。あの時も、最後に残ったのは俺たち3人だったよな。確か……、あの時勝ったのは……」
「一騎！」

途中まで出かかった俺の言葉は、狂夜によって遮られた。

「別にいいじゃねえーか、昔のことはよお」

「そうですよ。それより、今、この時を楽しみましょう」

「そう……だな。悪い、不粋だったな」

お互いに小さく笑い合う俺たちは、その言葉を最後に、誰が言い出したわけでもなく、ゆっくりと互いに距離を取った。

十分に離れたところで、俺たちはただ静かに待つ。

今日一日中喧騒が絶えることの無かった学園が、異様な静寂に包まれた。

動かない、話さない、仕掛けない

5

4

3

2
……

ポーンポーンポーン

終焉の闘いの合図を担ったのは、奇しくもこの卒業式バトルの開

始を告げた、中央のカラクリ時計だった。

来たっ

カラクリ時計のカラクリが発動すると同時に、俺は《神楽》を抜き放ち、疾走する。

狙いは優風だ。

いくらなんでも、学園最強の魔術師相手に遠距離戦は分が悪…

「いいっ！！！！」

理性じゃない、本能が俺を飛び退かせる。

次の瞬間

俺の今まで進んでいた地面が破裂した。

それは、俺と同様に優風へ疾走した狂夜が俺に目掛け発砲した、大口型片手（一般人なら両手）銃によるものだった。

「あんにやろ、よくも」

激昂を吐き出し、俺は再び優風へと駆ける。

しかし、やはり先手は狂夜に取られた。

狂夜は俺に向けていた銃口を優風に定め、弾倉に残る全ての銃弾を撒き散らす。大気を焼く弾丸が、凄まじい銃声と共に銃口から吐き出された。

「うふふ」

耳を撫でる、優風の自然な笑い声。

狂夜が放った銃弾はその全てが、優風の回りに張られた不可視の結果によってひとつ残らず阻まれた。

だが、狂夜はそんなこと承知の上だ。

銃弾はあくまで囷。

本命は大きく振り被った両腕から繰り出される、大地をも砕く豪剣の一撃だ。

ガチィーーーーーン

「くそっ！」

甲高い音と共に、狂夜の大剣は純白に身を染め上げた優風の使い

魔が重なる五本の剣に受け止められた。

ちなみに、俺自身も突如として現れた純白の乙女×6と交戦している真つ最中だ。

しかし、彼女たちは生物ではない。

つまり、手加減は無しだ。

俺は初めの一太刀で一番手前にいた奴の首を断ち斬り、返す刀で2体目の胴を上半身と下半身の2つに分ける。剣を振り下ろしてくる3体目は、すぐさま剣を握る手の手首を断ち、空を飛ぶ剣をキャッチ。背後から襲いくる4・5体目を振り向くと同時に放った回し蹴りでまとめて吹き飛ばし、俺が投げた純白の剣は最後の一体の喉元に深々と突き刺さった。

俺とほぼ同時に5体を撃退した狂夜と共に、俺たち二人は、もう一度飛び出そうと全身の筋肉を緊張させる。

突然、眩い光が辺りを覆った。

「な、なんだ？」

グランドを焼く金色の閃光。

その光が絶えると、頭部に立派な角を生やした気高き幻獣。ユニコーンが俺たちの目の前に現れ、荒々しく蹄で大地を打ち鳴らしていた。

「なんちゆうモノを召喚しやがったんだ」

俺が悪態を呟くと同時に、計八発の銃声が轟いた。

銃声は八発。

その内、俺を狙った銃弾は三発。

残りは全てユニコーンだ。

「またかよっ」

「ブルルルル」

俺は自分に向かって来る銃弾を《神楽》で斬り伏せ、ユニコーンはその角で銃弾を弾き落とした。

「ヒヒーン。ブルルルブルル」

ユニコーンが吼える。

そして、鋭い角をもつて狂夜を串刺しにせんと、銃弾の如き速度で疾走した。

「やるか、かかってこい」

狂夜は溢れ出る狂気にその顔面を染め上げ、凶暴な笑みをもって正面からユニコーンと対峙した。

狂夜が既に弾を充填し終えた銃を構え、ユニコーンに向けて引き金を引き、惜しむことなく全弾をばら撒く。

ユニコーンは懸命に銃弾を叩き落としていたが、遂にその中の一発が角の根元に突き刺さった。

大きくのけ反るユニコーン。

「おらああああああー」

そのひび割れた角の根元に、狂夜の大剣が食らいた。けたたましい音と共に根元から角が折れる。

「ヒ、ヒヒヒヒー」

力の源を無くしたユニコーンは、申し訳なさそうな眼で優風を見て消えた。

さすがは狂夜。

楽々伝説の幻獣を退けやがった。

えっ、俺？

俺はたつた今消えたユニコーンの主、優風と死闘を繰り広げているまっ最中だ。

「うふふふ。さすがは一騎、上手く避ますね。一度でも捉えることができれば、それで仕留められるのに」

「笑いながら怖いこと言っな」

俺VS優風。

その戦況は、俺がやや劣勢だった。

優風の肩に羽織られていた羽衣は、ただの羽衣じゃない。その絹の軟らかさと鋼の強度を併せ持つ羽衣は何処までも伸び、獲物をとらえんと空中を動き回るそれに一度捕まれば、逃れる術はない。

「えいっ」

「熱つつつ」

「たあ」

「つ、冷てえー」

俺の左肩が酸素を奪い去る業炎に焼かれ、右肩が絶対零度の冷氣に凍らされる。

羽衣の合間を縫って時折織り混せてくる魔法攻撃。

ダメージは少ないものの、確実にこちらの体力が奪われる。

でも……

「さすがにもう飽きたぞ」

俺は空を駆ける羽衣の攻撃パターンを読み切った上で、満を持して優風に目掛けて駆けだした。

その動きについてこれず、羽衣が俺の代わりに宙を掴む。

羽衣の制空圏を抜け出した俺を待ち構えていたのは、より強力かつ絶大な魔術のフルコースだった。

焔に身をやかれ、氷塊に身を貫かれ、雷に腕を焦がされる。

「ぐっ」

口から洩れる痛みを無理やり呑みこみ、全身に様々な傷跡を刻みつけながら、それでも俺は前へと踏み込んだ。

そして優風目掛けて、袈裟斬りの斬撃を結界に叩き込む。

しかし、結界は壊れない。

ダダダン

断続する銃声。

「オラアアアアアア」

雄叫びを上げる狂夜の声。

本能の命じるまま急いで横手に飛び退くと、俺が今までいた場所越しに、銃弾と大剣が優風結界に突き刺さった。

しかし、結界は壊れない。

「ちっ。まだか」

悪態を洩らしながら飛び退く狂夜。

そして、飛び退き様に俺に向けた眼は笑っていた。

「チクシヨウ。アイツ狙ってやがったな」

憤激を闘志に替え、俺は狂夜目掛けて飛び出した。

後退しながら俺に向けて銃の引き金を引く狂夜。

俺は銃口から吐き出された瞬間に、その銃弾を切り伏せた。

二つに別れた銃弾が、俺の両腕を掠め背後に流れる。

両腕に刻まれる火傷の痛みを無視して、俺は更に踏み込み、下方から狂夜の左脇腹に《神楽》を走らせた。

ニヤリと不敵に笑う狂夜。

鈍い音と共に、横手から振るわれた大剣が《神楽》の腹を叩いた。その衝撃に、俺の身体が横に流れ、絶望的な隙を作る。

繰り出される大剣の刺突。

その切っ先が俺の胸を切り裂く前に、俺は《神楽》の流れに乗り、高速で体を旋回させた。

狂夜の眼の前で俺の身体が一回転し、《神楽》の刃が狂夜の首筋に食らいつく。

次の瞬間。

狂夜の巨躯が宙を舞い、上空で激しい銃声が轟いた。

鉛玉の礫が、容赦なく俺目掛けて降り注ぐ。

「しゃらくせー」

高速から神速に達した《神楽》は、空中に銀光の軌跡を残しながら大気を焼く銃弾を刹那のうちに一つ残さず切り伏せた。

だが、銃弾の次は再び大剣の重い一撃が、狂夜の笑みと共に出現した。

豪力の命ずるままに大剣が大気を切り裂き、俺に襲いかかる。

「破っ！」

「んぐっ！」

ぶつかり合う、叩き押し、潰して切断する大剣と、滑り、切り裂く太刀の刃。

「つう~~~~」

雷撃のような一撃。

上空から斬撃は《神楽》で受け止めたが、その有り余る衝撃によって腕が痺れ、俺の足下の地面が陥没した。

「はっはっはー！ー。よく止めたな、一騎」

「ったりめー！っだ」

地面に舞い降りる狂夜と俺の鏢迫り合い。

鋼同士がこすれ合う甲高い音が辺りに木霊した。

「ー！ー！ー」

迫りくる脅威を感じ取り、俺と狂夜が弾かれたように飛び退く。

すると、俺たちが今までいたところに、七色に輝く魔法剣が突き刺さり、地面を粉々に吹き飛ばした。

「私をのけ者にするなんて、2人ともひどいですよ」

俺と狂夜が睨めつける視線の先には、プンプンと分かりやすいくらいに頬を膨らませる優風が、俺たちに箒を向けていた。

「子供か、お前は」

そのあまりにも子供っぽい姿に狂夜が呆れ気味に呟くと、優風は相変わらず使いにくそうな箒を振りかぶり、

「私も混ぜてください、ねっ」

満面の笑顔で微笑んで、俺たち目掛けて思いつきり箒をフルスイングした。

するとその軌道上に光の帯が出現。

閃光を伴って強力強大な魔力の塊が俺たちに襲いかかる。

「っげ！」

「マジかよ」

狂夜と俺は口々に絶叫し、その攻撃の射程圏外へと飛び退いた。
が……

「まだまだ、行きますよ」

その光の帯の攻撃は一度だけではなかった。

ノリノリでバットをフルスイングする優風に合わせて、次々と生み出される光の帯が俺たちを襲う。

高熱の纏った光の帯により、辺り一帯の温度が急激に上がった。

だが、光の帯の攻撃はあくまで囷。

優風の攻撃から逃げ惑う俺と狂夜の周りが、突然暗くなった。

「ん？」

「何だ？」

二人揃って上空を見上げると、そこにはいつの間にもやらずに作られ出ていた超巨大な氷の彫刻が浮かんでいた。

「ヤマシナトカゲモドキです」

「「なんだそりゃ？」」

「いつ、せー、のー、っせ」

優風の掛け声よろしく、氷の鉄槌が俺と狂夜目掛けて振り落される。

だが、

「「いい加減にしるよっ」」

その氷の鉄槌は、完全にハモツた俺と狂夜の掛け声と、氷の鉄槌目掛けて突き出された二つの刃によって粉々に砕かれた。

辺り一帯の温度が元に戻る中、俺と狂夜は改めて優風へと飛び出した。

しかし優風は、これまたとんでもない防御策を取ってきやがった。「神代より生きし汝が守るは魔界の門。現代に生を受けし我が開くは魔境の門。今、我との盟約に応じ、ここに来たれ。冥犬ケルベロス」

優風詠唱と共に暗い闇の穴が出来たかと思うと、その穴から三つの頭部を持つ地獄の番犬、ケルベロスが禍々しい瘴気を携え飛び出してきた。

「いつけー、ケルちゃん」

「G A A A A A A A」

優風の指揮に従い、人も簡単に丸呑みに出来そうな大きな口から涎を垂らすケルベロスが、俺と狂夜に疾走してきた。

「犬っころが、俺様の相手をする気かつ」

心底楽しそうに大剣を振りかぶる狂夜の声が響き渡る。

俺も負けてはいられない。

狂夜が一番右の頭目掛けて跳ぶのを視線の端に収めながら、俺自身もケルベロスの頭部へ飛びあがった。

二つの刃が、三つの頭部のうち左右二つに襲いかかる。

しかし、次の瞬間。

「はあ？」

「何いつ？」

突如として俺たちの眼の前からケルベロスが消えた。

「スキあり」

そして、優風の楽しげな声と共に、空間を割って出現した無数のダガーが空中で身動きの取れない俺たちに飛来した。

俺と狂夜はガムシヤラに刀を振るいダガーを叩き落とす。

だが剣筋の間を縫って飛び出たダガーが、俺たちの身体をズタボロに引き裂いた。

制服に幾多もの血を滲ませながら、俺たち二人は何とか五体満足のまま、血の緒を空中に残し地面に着地する。

「なんちゅうフェイントを入れやがんだ、あいつは」

「まったくだ」

荒々しく苛立ちと興奮を吐き出す狂夜。

俺も全くの同意見だった。

だが、それどころじゃなくなった。

「創成の器、輪廻の門、汝が神を受け入れよ……」

耳を打つ、優風の詠唱。

それは対悪魔軍を想定して造られた、超広域殲滅絶神魔法の詠唱だった。

「「やべえっ」」

俺と狂夜が口々に叫び、優風へと疾走する。

再び空を駆ける羽衣が俺たちに襲いかかるが、空を自由に駆ける羽衣を俺たち二人は渾身の力を持って剣を振るい、その凄まじい剣圧で羽衣を切り裂いた。

そして同時に一足一刀の間合いに入り込むと、情け容赦ない全力の一撃を優風目掛けて繰り出した。

ピキッ

絶対無敵を誇る優風の結界に僅かなヒビが入る。

しかし、詠唱を止めるには至らない。

「な、コラ」

「待てっ、優風」

「待ちませうん」

優風は滑るように俺たちから距離を取り、最後の一節を口にした。
「四大天使ウリエルの名の下に裁かれよ。“ジャッジ・メント・フレア”」

瞬間、既に夕暮れ時だった空が昼間のように明るくなり、光輝く黄金の焰柱が天上から降り注いだ。

コレは、

マジで、

ヤバい！

俺は後先を一切考えず、制御装置をぶち壊した。

途端に俺の見る世界が変わる。

そして、制御装置を壊したのは俺だけじゃなかった。

俺と同じく制御装置を壊し、体中を赤黒く染め雄叫びを上げる狂夜。

俺たちの最後の瞬間が始まった。

俺は《神楽》を優風目掛けて投げた。

矢の如く、空を駆ける《神楽》

その矢は一本ではない

狂夜も己の大剣を優風目掛けて投げていた

ガシャンというガラスの割れる音が辺りに木霊する。

「きゃっ」

同時、同所に突き刺さった2つの矢に、遂に優風の絶対結界が碎け散った。

降り注ぐ焰柱

その間を縫い駆ける俺は《神楽》を地面に落ちるスレスレで救い上げ、そのまま優風が持つ簪を断ち斬り、返す刀で袖口から覗く優風のリングを断ち切った。

幻のように消える焰柱

「オラァー」

これは幻聴じゃない

即座に振り反る俺の眼に、大剣を振りかぶる狂夜が映る。

ダメだ。避けきれねえ。

俺の左腕の肘から先が、血の緒を引きながら宙を舞う。

リングは……まだ割れてない！

そして

ここにきて、初めて

初めて狂夜に隙が出来た

だが、どうする？

残る腕は右腕のみ

これでは、狂夜の四肢の一本すら斬り飛ばすことは出来ない

喉を貫いても、狂夜なら反撃……

いや、まてよ……

そうかつつ！

「ウオオオオオーーー」

俺は即座に《神楽》を逆手に持ち替え、

柄頭を狂夜の喉にねじ込んだ。

「ガハッ」

喉に強打を撃ち込まれ、激痛に苛まれる狂夜

「呼吸を止めりゃあ、お前でもきついだろ！」

「……………」

声にならない空気を吐き出し、狂夜はどこか満足したように笑って背中から地面に倒れ込んだ。

『けっ、けっちゃーくっ！！ 総時間5時14分29秒の死闘に次ぐ死闘。その頂点に立ったのは、SSの“J（侍）”萩原一騎だ。ああー』

太陽が地平線の彼方に沈む頃、長かった闘いが、今ようやく終焉を迎えた。

エピソード 終演を彩る天に咲く花

闘いが終わり、保険医の先生と優風に左腕をくつつけて貰った俺は、全校生徒の集まった体育館の壇上に上がり、校長から表彰を受けた。

「表彰状 萩原一騎殿

貴殿は第78代卒業生に於いて、その気高き精神と逞しい肉体で戦い抜き、頂点の栄冠を手にしたことを讃え、これを賞します

平成21年3月23日

桜花学園学園長

おめでとう、一騎君」

校長から表彰状とトロフィー、そして300万円の小切手を渡された瞬間、体育館の中が拍手と喝采に包まれた。

そんな中、あの実況していた女の子が、壇上に飛び乗り、俺にマイクを突き付けてきた。

「卒業式バトルの王者、萩原一騎さん。今のお気持ちをどうぞ」

「あ、ああ。そうだな……」

俺は会場の仲間の顔に眼を向け、浅く瞼を閉じた。

「初めは……、つか、入学した時は、……なんてメチャクチャな学校だろうと思ったな。何かに付けてケンカして、バカやって。自慢できることなんて、なんも無いかもしれねえけど。でも、これだけは言える。俺にとつて、最っ高の三年間だった」

俺の言葉に、会場中が沸き上がった。

「おお！ 素晴らしいお言葉ですね。それで、一騎さん。もう一つだけ質問しても宜しいですか？」

「ああ、何だ？」

「ズバリ、賞金の300万円は何にお使いになれるおつもりですか」

「あつ」

きたっ！！

待ちわびたその質問に、俺を含めた卒業生一同がニヤツと笑った。
「あのー、一騎さん。どうかしましたか？」

「あつ、わりいわりい。何でもない。そんで、300万円の話だが、もう全額使っちゃったよ」

「えっ、それは一体どういう……、キャッ」

首を傾げる彼女の言葉は、突然鳴り響いた轟音に掻き消された。

「やっべ。もう、おっ始めやがったか。おい、在校生諸君。全員まとめて、さっさと表に出る」

俺は彼女からマイクを引ったくり、体育館の全員を外に出るよう促した。

ピピュ~~~~ドーン

ピュ~~~~ドドーン

「ワァー……。何だアレ。スッゲー」

何処からともなく零れる、驚きの声。

既に夜の帳が降ろされた体育館外の夜空は、次々と打ち上げられる花火に、色鮮やかに染められていた

そう

コレこそが俺たち卒業生全員でした約束だった。

卒業式バトルの賞金で在校生にモノ以外の何かを残したいという思いから持ち上がった、季節外れの大花火大会。

クサイ演出に思えたが、評判は上々のようだ。

夜空に咲き誇る大きな花火の一発一発に、学園生活の思い出が蘇ってくる。

そして時間が過ぎ、うち上がる花火がもう少しになった頃、今日の為に特別に作った特大の花火が夜空に咲いた。

「……あ」

刹那に咲くその花火の色はピンク色。

それから、大きな桜が次々と春の夜空に咲いた。

そんな上空ばかり見上げる俺の手に、嫉妬でもしたのか、桜花学園の桜の花弁が一枚舞い降りた。

そして

俺は、今この時まで溜めていた言葉を、囁くような大きな声で吐き出した。

ありがとう

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2373v/>

ラストバトル

2011年7月27日00時37分発行